117.

617.7

種々ナル脊椎動物眼球ニ於ケル脂肪及ビ類脂肪 殊ニ「コレステリンエステル」ノ發現ニ就テ 個體發生學的竝ニ種屬發生學的研究

第 2 報

家鷄「エンブリオ」ノ眼球ニ就テ

縣立神戶病院病理科(主任中院博士)

森 十 司

[昭和8年7月17日受稿]

Aus dem pathologischen Institut des Provinzial-Hospitals zu Kobe (Direktor: Prof. Dr. Nakanoin).

Ontogenetische u. phylogenetische Forschung über das Vorkommen von Fett u. Lipoid, besonders von Cholesterinester, im Bulbus verschiedener Wirbeltiere.

II. Mitteilung:

Über den Bulbus des Hühnerembryos.

Von

Dr. Juji Mori.

Eingegangen am 17. Juli 1933:

Der Verfasser hat bereits mitgeteilt, dass bei der systematischen Untersuchung beim Kaninchenembryo das Vorkommen des Lipoides, besonders des Cholesterinesters in allen Bulbusgeweben viel stärker war, als er erwartet hatte.

Bei seiner diesbezüglischen Untersuchung im Hühnerembryo stellte der Verfasser dasselbe wie im Kaninchenembryo fest.

Der Verfasser berichtete weiter über die Färbungs- u. optischen Verhältnisse jener Substanz beim Hühnerembryo im Vergleich zu denen beim Kaninchenembryo.

(Kurze Inhaltsangabe).

第 1 章 緒 論

余ハ鑿ニ家兎胎仔ノ各妊娠日ニ於ケル眼球ニ就テ、脂肪及ビ類脂肪殊ニ「コレステリンエス テルーノ發現ニ關スル研究ヲ試ミ,之ヲ本誌第45 年第8號(第523號)ニ發表セリ.次デ余ハ 家鷄「エンブリオ | ノ眼球ニ就テ再ビコノ問題ノ檢討ヲ試ミンガ爲各孵化日數ニ應ジテ「エンブ リオーヲ抽出シ其ノ研究ヲ遂ゲタリ、而シテ其ノ得タル所ノ成績ハ家兎胎仔ニ於ケルト略ボ相 似タルモ亦多少異ル所ナシトセズ、以下之ニ就テ述ブル所アラントス。

第2章 文獻ノ概要

家鷄「エンプリオ」ノ眼球ニ於ケル脂肪及ビ類脂肪 | ステアトーゼ」ヲ見ズ. ノ競現ニ關スル系統的研究ハ家兎胎仔ニ於ケルト同 **檬余ノ寡聞ナル禒ニクヲ檢索スルヲ得ズ, 從テ之ニ** 關スル文獻ハ只僅ニ成熟セル家鷄ニ就テ内山泰(昭 和5年) 氏ノ試ミタル詳細ナル系統的研究以外,終 ニ之ヲ見出シ能ハザルヲ遺憾トス・氏ノ研究ハ生理 的及ピ「コレステリン 飼養家鷄ニ就テ行ハレ

- 1) 家鷄ノ虹彩筋及ビ毛標筋ニ於ケル筋脂肪化
- 2) 筋脂肪化ノ發現理由考察竝ニ野鷄虹彩筋及ビ 家鶏ノ外眼筋對照檢索
- 3) 其ノ他ノ眼球組織内ノ脂肪出現 ョリナリ、主トシテ虹彩及ビ毛様體筋ノ胎生學的研 究及ビ生理的脂肪化ノ形態及ビ發現ノ理由ニ及ビ、 更ニ同屬タル野鷄ノ眼球ト對照比較セリ. 而シテ眼 球組織内脂肪ノ發現ニ關シテハ下ノ如ク述ペタリ.
- A) 角膜ニハ「コレステリン」飼養ノ際ニ於テ家兎 ニ見ラルル如キ人類ノ老人環ニ酷似セル類脂肪沈着 ヲ見ルコトナシ,但シ少量ノ脂肪ハ正常時ニ在リテ モ腿を角膜ノ全範圍ニ亙リテ發見サル瞳孔領ニモ亦 出現ス、「コレステリン」飼養動物ニ於テハ只輕度ノ 増加ヲ見ルニ止ル. 其ノ所在ハ中層卽チ角膜板層ノ 特ニ鬆竦ナル部ニ比較的多ク、邊緣部ノ上皮下ニ組 織球、鞏膜移行部ノ血管周圍ニ外膜細胞ノ増加浸潤 アリテク等ガ脂肪顆粒ヲ含有セルヲ見ル・然レドモ| 「コレステリン」飼養家兎ニ見ルガ如キ高度ノ「コレ

- B) 鞏膜内ニ在リテハ結締織細胞中ニ屢々脂肪顆 粒ヲ見、「コレステリン」飼養家鷄ニ在リテハ稍々増 加ヲ來スモ遊走性脂肪貧喰細胞乃至脂肪細胞ノ出現 ヲ見ズ.
- O) 網膜色素上皮細胞ハ人類及ビ家東ニ在リテハ 生理的ニ脂肪顆粒ノ存在ヲ見、殊ニ後者ニ在リテハ 「コレステリン」飼養ニヨリテ影響ヲ受クルコト大ナ リトセラルルモ家鷄ニ在リテハ脂肪顆粒ヲ認ムルコ トナシ.
- D) 網膜視細胞殊ニ圓錐體外節中ニハ鳥類及ビ爬 蟲類/或者ニテハ球狀/油滴存在シ, 此油滴ハ自然 的ニ赤色綠色又ハ黃色ニ着色セルコトハ周知ノ事實 ナリ、此事實ハ又死テ圓維體ガ色彩鑑識ニ與リ圓柱 體ハ只明暗認識ニノミ役立ツトノ散ヲ補助スルモノ ナリ,然ルニ著者ノ家鶏ニ就テノ觀察ハ其ノ所見ヲ 異ニス、卽チ視細胞ヲ個々ニ遊離セシメテ檢スルニ 油滴ハ單ニ圓錐體內ニ限ラズ多クノ圓柱體外節ノ尖 端ニ近キ部分ニ於テモ亦存在シ、其ノ着色ハ圓柱體 ノモノハ赤色油滴多ク, 圓錐體ニハ綠色及ビ黃色ヲ 呈スルモノ多シ、此油流ハ常温ニ於テ液狀ヲナシ薄 キ蛋白膜ニ包被セラレ、體內一般ノ脂肪新陳代謝ニ ハ關係スルコトナク,「コレステリン」過剰供與ニモ 影響セラレズト.

第 3 章 研究材料及ビ其ノ方法

余ハ研究材料トシテ家鷄卵ノ人工孵化ニョル「エ ンプリオ」ヲ用ヒ、其ノ孵化第4日ヨリ第19日卽チ 破殻助日迄ヲ研究ニ供シタリ、而シテ卵ハ常ニ午後 2時乃至3時ノ間ニ孵卵器内ニ入レ、 各孵化日ニ應 ジ「エンプリオ」/ 抽出ヲ試ミタリ・抽出モ亦毎常午 後2時乃至3時ノ間ニ於テシ、抽出セル「エンブリ オ」ハ 家兎胎仔ト同 ジク直ニ 10%「フォルモール」水 溶液内ニ固定シ「ゲラチン」包埋氷結標本又ハ「パラ | ト同様深キ注意ノ下ニ之ヲ試ミタリ.

フイン」及ピ「ツエロイジン」包埋切片トナス.

染色方法亦家兎胎仔ト同樣肪脂肪染色トシテハ專 ラ「ズダン」III、「ヘマトキシリン」複染色、「ニルブ ラウズルフアート」染色ヲ試ミ、必要ニ應ジ「ノイト ラルロート 染色, Smith 氏法, Fischler 氏法等ヲ試 ミ, 別ニ「ヘマトキシリン」「エオジン」染色ヲ試ミシ コト特ニ言ヲ俟タズ・重屈光性検査亦家兎ニ於ケル

研究ノ成績 第 4 章

以下其ノ成績ニ就テ述ブルニ當リ,聊冗漫ノ嫌ナキニアラザルモ逐日的ニ之ヲ敍述スベシ・

孵化第4日

此時期ニ於ケル「エンブリオ」ハ鏡檢上、著明ニ肥 厚セルト皮細胞層ヲ以テ圍メル, 廣濶ナル内腔ヲ有 スル神經管ト,其ノ左右兩側ニ位セル眼盞トヲ其ノ 主ナル器官トシ, 其ノ以外ニハ極メテ菲薄ナル1層 ノ内皮細胞ヲ壁トセル大小ノ管腔即チ Coelam ヲ有 スルニ過ギザル鬆疎ナル中胚集性細胞ノー塊ニ外ナ ラザルナリ.

而シテ第1眼胞ハ前面既ニ陷入シ内外兩葉ヨリナ ル眼器ハ今ヤ其ノ前方ニ漸ク水晶體板ヨリ游離獨立 セル水晶體胞、即チ水晶體原基ヲ擁スルニ至ル、眼 盞ノ外葉卽チ色素上皮細胞ノ原基ハ此時期ニ於テハ 未ず色素顆粒ノ發生ヲ見ズ、細胞ハ短圓柱狀ヲ呈シ 多クハ1層、時トシテハ不整ニ配列セル2層ヨリナ リ、中心部創チ後極附近ニ在リテハ核ハ圓形又ハ精 圓形ヲ呈スルモ末梢部ニ至レバ稍々長徑ヲ増ス, 網 膜部トノ移行部卽チ眼盞ノ前端ニ於テハ再ビ其ノ長 徑ヲ減ジ圓形又ハ短橢圓形トナル、核分裂像ハ其著 明ニシテ專ラ内側即チ網膜側ニ於テ行ハル.

内葉卽チ固有網膜ノ原基へ圓形、橢圓形若々へ紡 錘形/核ヲ有スル細胞ノ密集ヨリナリ. 後極部ニ於 テハ細胞ノ配列 5.6 層苔クハ以上ヲ數へ,末梢部ニ 於テハ稍々其ノ列ヲ滅ズルモ核ハ却テ長徑ヲ加フ, 此細胞群中其ノ内外兩側ニ位置スルモノハ胞體稍を 胞狀ヲ呈シ且其ノ部ハ幾分繊維樣ノ造構ヲ具フ,殊 ニ内側ニ於テ蓍シ、核分裂ハ色素上皮側即チ外側ノ 細胞ニ依テ盛ニ鶯マルルヲ見ル.

水晶體原基ハ既ニ水晶體板ヨリ獨立セル細胞囊ニ シテ形頂點ヲ前方ニ向ケタル三角形ヲ呈シ、中心ニ ハ尚ホ可ナリ廣キ腔ヲ殘ス, 腔内ニハ少量ノ繊維素 樣物質ヲ含メリ・細胞嚢壁ハ比較的厚ク敷層ノ上皮 細胞ヨリナル、前方ノ細胞ハ圓形又ハ転橢圓形ノ核 ヲ有スル3,4層ノ短圓柱細胞ニシテ不整ニ並列シ、 後方ニ於テハ蓍シク其ノ長徑ヲ増シ長圓柱形ノ核ヲ 有スル2,3列ノ細胞ノ並列ヲ見ル・卽チ早ク旣ニ細 胞ノ繊維化セントスルノ狀ヲ明ニス,而シテ此部ノ 細胞ハ甚著明ニ 空胞ヲ有ス.

眼盞ノ周圍組織ハ幼弱ナル中胚葉性細胞ノ鬆疎ナ ル集 落ニシテ 眼 盞外 葉ニ密接セル部ニハ既ニ多數 ノ毛細管腔ノ生成ヲ見ルモ血球ノ存在ハ未ダ甚稀ナ IJ.

水晶體原基ノ前方ニ位セル上皮細胞層ハ,單層時 トシテ2層ノ骰子形細胞不整ニ並列シ以テ體表ヲ被 フ. 上皮細胞層水晶體原基トノ間ニハ未ダ中胚葉件 組織ノ進入ヲ見ズ、此部ノ上皮細胞ハ多クハ圓形ノ 核ヲ有シ,中心ニ核小體ト見ルペキ「ヘマトキシリ

ン」濃染ノ小體ヲ認メ、且往々色素顆粒カト思ハルル小顆粒ヲ有スルモノアリ、此上皮層ノ外表ニハ更ニ繊細明朗ナル1層ノ細胞ヨリナル羊膜ノ存スルアリテ以テ全胚胎ヲ被覆セリ・

水晶體原基ト眼盞トノ間ニ存スル腔隙即チ後ノ硝 子體腔ニハ鬆竦ニシテ繊細ナル網狀繊維ノ存在ヲ見

脂肪染色反應及ビ重屈光性檢査ハ此日ノモノニテ ハ眼球ノ形態未ダ基不十分ナルニョリ特ニ之ヲ行ハ ボ・次日卽チ第5日ノモノョリ之ヲ試ミタリ.

孵化第5日

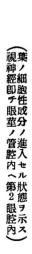
第4日=比スレバー般發育著シク進ム,殊二水晶體,發育著シ即チ水晶體ハ早クモ前面凸隆シ後面少シク陷凹セル扁平「レンズ」狀ヲ呈シ,前面上皮細胞層ハ3,4列,骰子形細胞ヨリナリ核ハ圓形又ハ橢圓形ヲ呈ス,赤道部ニ至レバ細胞ハ漸次其ノ高徑ヲ増シ,從テ核モ亦長圓性狀トナル,而シテ細胞ノ漸次繊維ニ化セントスルノ狀況甚鮮明ニ見ルヲ得ベシ,後面ニ於テハ細胞ハ既ニ殆ド繊維化シテ中央部ニ極メテ細長ナル核ヲ有ス・之等ノ上皮細胞及ビ繊維ハ

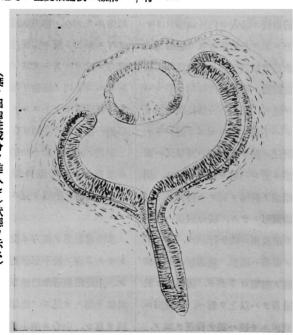
極メテ多數ノ小空胞ヲ有シ殊ニ赤道部ニ於テ著シ. 此日ニ於テハ前日迄ノ中心部ニ存セシ腔ハ既ニ全ク 繊維ノ爲メニ充塡セラル.

視神經進入部ハ殊ニ鳥類ニ在リテハ眼球後極ヨリ 可ナリ後下方ニ偏スルニョリ「エンプリオ」/ 眼球ニ 於テモ視神經進入部ハ著シク網膜ノ一方ニ偏シ, 此 部ヨリリ前後兩側ニ於ケル網膜ノ領域ハ頗ル其ノ廣 狹ヲ異ニス,其ノ比ハ2:1 若クハ其ノ以上ニ及ブ,殊 ニ6,7日以降ニシテ所謂「ベクテン」ノ發生ヲ認ムル モノニ在リテハ特ニ其ノ偏在ノ著シキヲ感ズベシ.

網膜原基へ視神經進入部ョリ可ナリ放レテ後極附近二於テ原徑最モ大ニシテ、赤道部ョリ前方ニ向フニ從ヒ漸次其ノ厚徑ヲ減ズ・細胞層ハ後極附近ニテハ7,8層乃至8,9層ヲ數へ赤道部ニ於テ5,6層ヲ數フ、核ハ紡錘形若クハ橢圓形ヲ呈シ密ニ集合シ略ポ放線狀ヲナシテ並列セリ・後極部ニ於テハ最內層ハ蓄シク繊維標造構ヲ呈シ且多數ノ空胞ヲ認ム・色素上皮則ニ面セル部ニ於テモ亦稍々繊維樣ヲ示シ、同ジク小空胞ノ存在ヲ認ム、此部ニ於テハ核分裂盛ニ行ハル・

家鷄「エンブリオ」(第5日)ノ眼球原基模寫視 神 經 發 育 ノ 狀 況





色素上皮細胞ハ既述ノ如ク短圓柱狀ヲ呈シ, 後極 並ニ赤道部ニ於テハ概ネ1列ニ, 前方網膜部トノ移 行部ニ近ヴケバ往々2列ニ並ペルヲ見且細胞ハ蓍シ ク其ノ高サヲ加フ. 色素顆粒ハ未ダ甚少量ナルモ漸 ク其ノ發生ヲ認メ純黑小顆粒狀ニシテ後極方面ニ於 テハ主トシテ細胞ノ豚絡膜側ニ存スルモ前方ニ至レ バ細胞全體ニ分布ス.

眼: 水の外兩葉部 チ網膜原基及 ビ色素上皮細胞 / 視神經(即チ眼莖) = 移行スル部ハ圖ニ示スガ如ク 特種 / 状態ヲ呈シ、 發生當時 / 眼莖ニ比シ大ニ其 / 趣ヲ異ニセルヲ見ル・而シテ此部ニ於ケル色素上皮 細胞 / 津續 タル細胞ハ全ク色素ヲ有セズ・

水晶體前方ニ存スル上皮細胞即チ將來角膜上皮ヲ 形成スペキ上皮細胞ハ前日ト同樣單層時トシテハ不 整ニ相重レル骰子形細胞ヨリナル,而シテ水晶體ト ノ間ニハ向ホ未ダ中胚葉性細胞ノ進入ヲ見ズ,此上 皮細胞ハ少シク眼部ヲ遠カレバ漸次扁平ナル1層ノ 細胞トナル・

確子體整ハ前日ニ比スレバ稍々廣濶トナリ,且繊維網モ亦著明トナル,水晶體原基ノ赤道部ト網膜原基ノ前端(即チ虹彩突起樣部)トノ間ニ繊細ナル繊維模索ノ相連レルヲ見ル, 恐ラク後ノ Zinn 氏帶ナルベシ

家鷄「エンブリオ」/ 水晶體ハ哺乳動物胎兒 / 水晶 體ニ見ルガ如キ水晶體血管網 / 發生ハ毫モ之ヲ認メ ズ, 且硝子體腔ニ於テモ同ジク血管 / 發生ヲ見ズ.

此日ノ標本ニ在リテハ眼盞周圍ノ中胚葉性組織ハ 既ニ一定ノ範圍ニ於テ細胞ノ増殖著シク漸ク隣接部位トノ間ニ一種ノ區別ヲ生ズル如ク,自ラ眼球外膜 ノ形成ヲ想像セシムルモノアリ,且色素上皮細胞外 側ニ於ケル血管網ノ發育ト共ニ赤血球ノ集合漸ク顯 著ナリ.

脂肪染色所見

網膜、色素上皮細胞 並ニ水晶體等ノ原基ハ殆ド | ヲ形成スペキ部分ノ方却テ網膜及ビ水晶能 「ズダン」ノ色ヲ取ラズ,只硝子體腔ニ僅ニ瀰蔓性黄 | モ著明ニ重屈光性ヲ發現スルモノノ如シ.

赤色ヲ呈スル同質性物質ノ存在ヲ見ルノミ、家鷄「エンブリオ」ノ硝子體腔染色ハ家兎胎兒ニ比シ著シク色彩淡調ニシテ而モ赤色ニ芝シク從テ彼ノ如ク鮮明美麗ナル染色ヲ見ズ、加フルニ「ゲラチン」包埋標本ハ家鷄「エンブリオ」ニ在リテハ殊ニ組織ノ收縮ヲ來スコト著明ナルガ爲、硝子體腔ハ僅ニ相重疊セル網膜原基ノ間隙ヲ占ムルノミニシテ染色反應並ニ其ノ構造ニ就テノ所見彼ノ如ク判明セザルヲ常トス・偶々收縮ヲ免レ球狀ヲ呈スル標本ニ於テハ硝子體腔ノ染色基微ニシテ殆ド見ルベカラズ・

眼部以外ニ於テ殊ニ著明ニ「スダン」染色ヲ呈スルハ腦內腔ナリトス, 即腔ハ帶黃赤色同質性物質ヲ以
テ充タサレ, 硝子體腔ニ比スレバ遙ニ鮮明ナリ. 眼球原基ト腦腔トノ中間ニ存セル中胚葉組織モ亦著明ニ「ズダン」ニ染ミテ瀰蔓性黃赤色ヲ呈ス. 羊膜細胞
ホーズダン」染色ノ赤色顆粒ヲ夥シク含有セリ.

「ニルブラウ」染色へ眼球ニ在ツテハ網膜原基/細胞,水晶嚢上皮,角膜上皮細胞等及ビ腦ノ神經上皮細胞等稍々濃青色ニ染メルト,羊膜細胞ノ微ニ紫赤色ヲ呈セル外認ムベキ染色反應ヲ見ズ.

重屈光性所見

染色反應ハ上記ノ如ク甚不鮮明ナルニ拘ハラズ重 屈光性物質ハ眼部及ビ其ノ他ノ組織ニ甚著明ニ發現 シ弱擴大ニテ檢スレバ恰モ梨子地様ノ觀ヲ呈ス,而 シテ結晶ハ主トシテ小針狀ニシテ溫ニヨリテ消失シ 冷却スレバ紀チ再現シ,再現セルモノハ極メテ多數 ノ十字型交叉像ヲ現ス・其ノ發現ノ狀況ハ網膜ニ在 リテハ核ノ配列ト略ボー致シテ放線状ニ存シ細胞内 並ニ細胞外ニ存在ス・水晶體ニ在リテハ繊維ノ走行 ニ件フテ専ラ其ノ間隙ニ現レ稍を長キ線狀ヲ呈セ リ・色素上皮細胞及ビ角膜上皮細胞並ニ水晶嚢上皮 細胞内ニモ亦著明ニ散在ス・硝子體腔ニハ之ヲ認メ ズ・向ホ此時期ニ於テハ眼球原基中脲絡膜及ビ鞏膜 ヲ形成スペキ部分ノ方却テ網膜及ビ水晶體原基ョリ モ薬明ニ類回光性ヲ発用スルモノノ加シ

孵化第6日

内臓諸器官ノ殺育前日ニ比シ俄然准捗セルモ眼球 自己ノ進化ハ前日ニ比シテ大差ヲ見ズ、但シ其ノ形 態ハ著シク増大ス.

色素上皮細胞ノ色素ハ其ノ量稍々増加セル外幾分 其ノ形ヲ變ジ個ペノ顆粒ハ稍々短桿狀ヲ呈ス、殊ニ 細胞ノ基底部ニ存スルモノニ著シ、色素ハ後極方面 ニ於テハ依然細胞ノ頂部ニ多キモ前方ニ向フニ從ヒ 漸次細胞ノ全部ニ分布スルニ至ル.

網膜原基ノ細胞列ハ前日ニ比シ稍々増加シ、後極 方面ニ於テ12,3層若クハ以上ヲ數へ, 赤道部ニ於 テ 7,8 層ヲ數フ. 色素上皮細胞及ビ網膜原基ノ細胞 (就中内外側ノモノ)ニ小空胞ヲ見ルコト前日ニ同

硝子體ノ微細繊維網內ニ特種ノ微細小圓形ノ小體 多數ニ存在スルヲ見ルペシ, 此者ハ第5日ノ標本ニ 於テモ多少之ヲ認メシモ此日ニ至リ著明ニ増加ス. 此小體ハ「ヘマトキシリン」ニ濃染シ、强擴大下ニ檢 スルモノ特ニ微細構造ヲ明ニセズ,大サハ細胞核ノ ½--5大ニ過ギズ,此小體へ後述スル如ク第8日第 9日ノ頃ニ至リ漸次其ノ敷ヲ減ジ 詮ニ全ク消失スル ニ至ル・此小體ニ略ボ類似ノ物質ヲ脳腔内ニ存スル 繊維網狀内ニ認ムルモ其ノ敷稍を少キガ如シ.

葦膜及ビ豚絡膜原基ヲ形成スペキ部ニ中豚葉性細 胞漸次多數ニ集落ス. 水晶體原基ノ發育ハ前日ニ比 シ大差ヲ見ズ.

脂肪染色反應

硝子體ノ瀰蔓性同質性黄赤色染前日=異ラズ、色 素上皮細胞及ビ網膜細胞内ニハ特ニ「ズダン」染色ノ 顆粒狀物ヲ見ズ、視神經進入部ニ於テモ亦脂肪染色 顆粒ヲ認ムルコトナシ.

眼部前面ヲ被フ上皮細胞層及ピ皮下組織(此日ニ 至レバ角膜實質ノ原基トナルベキ中胚葉性組織ガ幾 分上皮細胞層ト水晶體原基ノ間ニ入り込メリンハー

外ニ存在セルヲ認ムペシ. 眼球後部ノ中胚葉性組織 ハ著シク瀰蔓性ニ「ズダン」=染ミテ黄赤色ヲ呈シ、 中ニ脂肪顆粒含有ノ多數ノ組織球模細胞ヲ含ム、腦 腔内内容ノ著シク「ズダン」ノ色ヲ取ルコト亦削日ニ 同シ.

網膜原基ノ細胞核ニシテ硝子體側ニ位置セル一部 ノモノハ「ヘマトキシリン. エオジン 染色標本ニテ 稍々其ノ形ヲ變ジテ圓ミヲ帶ビ且「クロマチン」ニ乏 シキ狀態トナリ、他ノ細胞群ト稍々解離セントスル ノ狀況ヲ呈スルニ至ル,此狀態ハ「ニルブラウ」染色 標本ニ於テ1層判明ニ見ルヲ得・ 卽チ之等細胞核ノ 染色他ノ細胞群ノ染色ニ比スレバ著シク淡シ、此等 1 群ノ細胞ハ將ニ節細胞層ヲ形成セントスルノ前稈 ナリトス.

角膜上皮細胞胞層並ニ其ノ連續タル上皮細胞ノ表 面ニハ「ニルブラウ」ニョリテ青染セル微細顆粒狀物 膜樣ヲナシテ附着セリ.

視神經進入部ニ於テハ「ズダン」III 及ビ「ニルブ ラウ」共ニ特異ノ染色ヲ見ズ.

重屈光性所見

重屈光性ノ發現甚著明ナルコト前日ニ同ジ、網膜 ニ發現スル重屈光性物質ハ多クハ小針狀稀ニ顆粒狀 ヲ呈シ全層ニ至リテ現ル、後極方面ニ最著明ニシテ 前方ニ至レバ稍々減少ス、而シテ細胞核ノ配列ニ準 ジ放射線狀ニ發現スルコト前日ニ同ジ. 色素上皮細 胞層ニモ點々顆粒狀若クハ小針狀ヲナシテ現レ、豚 絡膜ビ鞏膜原基 部ニ於テモ亦極メテ多數ノ結晶ヲ 見ルペシ、水晶體ニ於テハ其ノ發現稍々少キモ尚ホ 且蓍明ニ發見スルヲ得ベク、繊維ノ走行ニ伴ヒ發現 スルヲ多シトス、角膜ノ上皮層及ビ實質ノ原基タル 中胚葉性組織内ニ於テモ亦著明ニ重屈光性物質ヲ見

眼組織ニ於ケル上記重屈光性物質ニ比シ更ニ著明 | ナルハ眼球後部ノ中胚葉性組織ニ於ケル重屈光性物 樣ニ微黃赤色ニ染ミ且顆粒狀類脂肪物質ノ細胞ノ内 │ 質ノ發現ナリトス,此部ハ「ズダン」染色ニ依リテ高 度ノ脂肪浸潤ヲ見,獨リ瀰蔓性ニ染色セノミナラズ, | 多數ノ脂肪顆粒ヲ含メル組織球細胞ノ存在ヲ見シ部 ナリシナリ.

上記電屈光性物質ハ主トシテ「コレステリンエス テル」ヨリ成レルガ如ク、溫ニ對スル消長ハ、親シ ク之ヲ鏡下ニ檢スルニ際シ誠ニ肚觀ヲ極ム. 而シテ 再現シタル結晶へ大小殆ド定型的交叉像ヲ呈スルヲ 見ルハ實ニ偉觀ナリトス.

孵化第7日

前日ニ比シ眼球ノ發育著シク進ム・

角障富質ハ既ニ可ナリ厚徑ヲ加へ、內皮細胞ノ一 部亦明 = 其ノ存在ヲ認ムルニ至ル, 但シ D 氏膜 ハ未 **ダ全ク之ヲ認ムベカラズ、上皮細胞層ハ尚ホー層ノ** 骰子形細胞ニ過ギズ.

虹彩亦幾分發育シ瞳孔緣ノ一部分ハ角膜後面ヨリ 雌闘シ短キ突起狀ヲ呈ス、毛檬體及ビ毛隙突起ノ發 育八未ダ之ヲ認メズ. 虹彩及ビ毛様體(未ダ毛様體ト シテハ區 別シ得ザルモ虹彩ノヅヅキノ部分ニ於テ) 部ニ於ケル網膜毛樣部細胞 (Pars ciliaris retinae) 'ハ蓄シク高徑ヲ増シ核ハ長圓形ヲ呈ス,此部ニ於ケ ル色素上皮細胞を亦著明ニ膨大シテ胞狀ヲ呈シ屢々 胞體ノ崩壞ヲ疑ハシムルモノアリ、虹彩後面ノ圓柱 上皮へ未ず色素ヲ含マズ、此時期ニ於ケル網膜ノ細 胞層へ前方ニ赴クニ從ヒ次第ニ其ノ層ヲ滅ジ削端卽 チ虹彩/後面ニ至レバ只1層/圓柱上皮細胞トナ ル,而シテ細胞ノ減少ハ漸ク以テ行ハレ,成熟動物 ニ於ケルガ如ク俄ニ其ノ層ヲ減ジ、所謂鋸齒狀緣部 (Orra terminalis) ヲ形成スルニ至ラズ・

網膜原基ノ細胞ノ分化ハ薯シク進ミ後極附近ニ於 テ核ノ配列 20 乃至 30 層ノ多キニ達シ、赤道部附近 ニ於テモ15,6層苔クハ以上ヲ數フベシ.最內層ヲ形 成セル繊維層亦著明ニ發育シテ明ニ獨立セル1層ト シテ認ムペク, 魔々固定ニ際シ硝子體ノ收縮ニ伴ヒ 繊維ノ一部へ内境界膜ト共ニ網膜面ヨリ離レテ微細

述ベタル如ク核ノ形狀及ビ配列ヲ變ジ母細胞群ヨリ 離開シ節細胞層ヲ形成セントスルノ狀歴然タリ.

水晶體ハ著シク敍育シテ固有ノ形態ヲ備フルニ至 ル,上皮細胞ノ配列.赤道部ニ於ケル細胞ノ變形並 ニ繊維化ノ狀況等前日ニ同ジク,空胞ヲ含メルコト 亦同前ナリトス.硝子體ノ微細ナル繊維ハ専ラ毛様 體部ニ匹敵スペキ網膜細胞ヨリ發シ,同時ニ水晶體 ニ向ツテ Zinn 氏帶ト見ルペキ繊維ヲ分派セルヲ見 ル. 碓子體内ニ存セシ核様小體ハ間ホ多數ニ存在ス・ 駅絡膜及ビ殊ニ鞏膜組織ハ蓍シク分化シ, 周圍ノ中 胚葉組織ト明ニ其ノ造構ヲ區別シ得ルニ至ル, 但シ **鞏膜ハ闹ホ未ダ繊維様ニシテ軟骨模構造ヲ呈スルニ** 至ラズ.

鳥類ニ於テ殊ニ特異ノ器官所謂 Pekten ハ第7日 ノ標本ニ於テ初メテ其 / 形態ヲ現ス・其ノ部位ハ眼 球ノ後下方ニ於テ網獏ノ末梢ニ近ク, Ora terminalis (未ダ判然其ノ發育ナキモ)ヲ離ルコト甚遠カラザル 部ニ之ヲ見ルペシ、組織的ニハ Bernd ノ指摘セル如 ク網膜原基ノ細胞及ビ色素上皮細胞ノ増殖ヨリナレ ル細胞性成分ノ中ニ眼球後方ノ中胚葉性組織ガ血管 ヲ伴ヒテ相加ハレルモノヨリ成立ジ、腫瘍狀ノ隆起 ヲ形成ス、其ノ隆起ヨリ更ニ線状突起ヲ出シテ深ク 硝子體內=挺進シ且其ノ末端「コルペン」 狀ニ膨大 ス, Pekten 内ニハ少數ノ圓形顆粒狀黑色色素及ビ血 球ヲ混入ス.

色素上皮細胞ノ色素顆粒ハ末ダ比較的稀疎ニシテ 核ノ周圍ニ存在シ、後極方面ニ於テハ多クハ短桿狀 ヲ是シ, 前部ニ於テハ顆粒狀ヲナス.

脂肪染色反應

眼球周圍ニ於ケル中胚集性組織内ニ見ル「ズダン」 赤染ノ脂肪及ピ類脂肪ノ含量ハ前日ニ比シ更ニ著シ ク増加ス, 卽チ眼球前面ニ於ケル表皮層及ビ皮下組 織内ニハ著明ニ赤染セル微細顆粒ノ,一部ハ細胞内 ニ,一部ハ遊離シテ存在セルアリ,更ニ眼球後方ニ ナル繊維網ヲ形成ス,最内層ノ細胞 3.4 列ハ前旣ニ | 於テモ多數ノ脂肪顆粒ヲ含メル組織球機細胞ノ夥シ

ク存在セルヲ認ムル外,組織ハ一懐ニ瀰蔓性ニ赤染 | ヲ認ムルニ至ヲズ. セリ. 色素上皮細胞ノ外側豚絡膜原基ニ於テモ亦多 敷ノ赤色微細顆粒ノ存在ヲ見ル.

眼球組織就中網膜ニ於テハ細胞内ニ類脂肪顆粒ノ 存在依然著明ナラズ、只內外兩側ノ繊維標部ニ於テ 少數ノ微細顆粒ヲ認ムルニ過ギズ、而シテ其ノ染色 1色調家兎胎仔ノ網膜ニ於ケルガ如ク, 他ノ部ニ比 シ稍々褐色ヲ帶ベリ、硝子體ノ染色ハ前日ニ比シテ 幾分其ノ色調濃厚ナルモ、依然同質性ニシテ細胞性 成分ヲ交エズ. 視神經進入部及ピ「ベクテン」組織中 ニハ未ず瀰蔓性苔クハ顆粒状「ズダン」染色ヲ見ズ・

水晶體ハー様ニ稍々淡ク赤ミヲ帶ベルモ特ニ脂肪 檬染色ト見ルベカラズ, 只前方上皮細胞層ノ表面ニ 於テ著シク「ズダン」染色顆粒ニョリテ形成サレタル 膜襟物ヲ附着セルヲ見ル、是レ恐ラク前房水中ニ存 セル脂肪樣物質ノ沈着セルモノナルペク、水晶嚢悶 有ノモノニアラザルペシ、角膜上皮細胞ハ比較的著 明ニ脂肪顆粒ヲ胞體內及ビ細胞間ニ含有セリ・

「ニルブラウ」染色ニョリ頭部骨骼ノ一部及ビ軀幹 ノ骨組織基質等稍を「ヴヰオレツト」ニ染色ス, 眼球 及ビ附屬器ノ染色ニ特異ノ所見ナシ、只網膜、視神 經及ビ其ノ他ノ眼組織並ニ近國ノ中胚葉性組織内ニ 稍々濃青ニ染メル顆粒狀物質繋シク發現シ初ム,其 ノ狀況家兎胎仔ノ中間時期ニ於ケルト同様ナリ.

硝子體ノ染色僅ニ紫ガカレルヲ認ム.

重屈光性所見

「ズダン」染色ノ類脂肪顆粒ノ眼組織内ニ於ケル酸 現少キニ拘ラズ重屈光性物質ノ發現ハ甚著明ナリ、 網膜ニテハ主トシテ內外兩層ニ集團的結晶塊著明ニ 發現シ,中間層ニハ稍々少ク, 脈絡膜及ど色素上皮細 胞内ニハ小ナル針狀結晶甚密ニ存在ス、角膜質質及 ビ水晶體ニハ其ノ發現稍々少シ、鞏膜及ビ眼瞼基質 ニモ亦小ナル針狀又ハ顆粒狀ノ物質多數ニ發現ス・ 視神經進入部ニ於テモ此日ノ標本ニ於テ蓍明ニ之ヲ

水晶體ノ重屈光性物質ハ前日ト同ジク繊維間隙ニ 沿っテ線狀又ハ針狀ニ現レ殊ニ赤道部ニ著シ. 上記 重屈光性物質ノ温ニヨリテ消失シ冷却スルニ從ヒ再 現シ, 定型的交叉像ヲ呈スルコト前目來ト同様ナリ.

孵化第8日

網膜原基ノ細胞列復聊變調ヲ呈ス、卽チ曩ニ分離 獨立ノ傾向ニ在リシ節細胞層ノ1群ハ此日ニ至リ全 然其ノ歸趨ヲ明ニシ、之ト同時ニ次位ニ存セシ細胞 ノ 5. 6 列ハ又其ノ核ノ形狀ヲ鬱ジテ圓ミヲ帶ビ日 「クロマチンアルム」トナリ、相互ノ間隔稍々鬆疎ト ナル、爲ニ本來ノ紡錘狀核ヲ有セル母細胞群ト明ニ 相異レル層ヲ形成セントスルノ狀ヲ認ムルヲ得ペシ 同時ニ色素上皮側ニ對セル細胞ノ1群モ亦同様ノ變 化ヲ起シテ其ノ内側ノ細胞ト相開離セントスルニ似 タリ、而シテ內外兩者ノ中間ニ存スル大部分ノ細胞 ハ依然紡錘形又ハ橢圓形ノ核ヲ有シ個々相密集シテ 存在スルコト舊ノ如シ、之等ノ細胞ハー面如上ノ變 化ヲ呈シッツ、一面盛ニ分化増殖シ爲ニ後極方面ニ 於ケル細胞列へ 30-40 層ヲ數へ, 遙ニ前方赤道部 ヲ越エタル部分ニ於テ 尙ホ 20 層內外ヲ數フペシ, 但シ之ヨリ以降日ヲ逐フテ核ハ漸次其ノ數ヲ減ジ代 フルニ網狀組織ノ増加ヲ見ルニ至ル,從テ核ノ配列 ハ蓋シ此頃ヲ以テ最大ナリトス.

「ペクテン」ハ前日ニ比シ稍々發育シテ根部ハ「ピ ラミツト」型ヲナシテ乳頭面上ニ鋒エ, 更ニ細長ナ ル突起ラ出シ硝子體內ニ挺進ス、*突起ハ主トシテ細 胞性成分ヨリナリ、多數ノ毛細血管腔ヲ擁ス、殊ニ 末端ニハ比較的大ナル加管腔ヲ有シ中ニ多數ノ赤血 球ヲ容ル, 色素顆粒ハ未ダ甚稀少ナリ. 硝子體内ニ 存セシ核標小體ハ大部分既ニ吸收サレ稀ニ其ノ殘骸 ヲ認ムルノミ,而モ繊維細ノ狀態ハ依然トシテ異ル ナシ.

虹彩後面ノ皺襞及ビ毛様突起ノ漸ク形成セラルル |認ムペク,「ペクテン||組織内=ハ未ダ重屈光性物質|| ヲ見ル,虹彩後面ノ内層圓柱上皮細胞ハ尚ホ色素ヲ

含マズ,色素上皮細胞ノ空胞標變化ハ蓍明ニシテ其 ノ甚シキハ胞體ノ崩壞ヲ思ハシムルモノアリ. 鞏膜 ハ漸ク軟骨襟構造ヲ呈スルニ至ル. 豚絡膜ハ色素上 皮細胞層ト軟骨線鞏膜ノ間ニ挾マリ非薄ノ層ヲナ シ、殆ド血球ノミヨリナレルノ觀アリ.

角膜寶寶へ其ノ周邊部ニ於テ小ナル血管腔ヲ認ムルモ血球ノ存在ヲ見ズ.上下兩眼瞼ノ起始ハ鈍短ナル突起狀ヲナシ,其ノ面ヲ被フ上皮ハ骰子形ノ基底細胞ノ上ニ1層ノ扁平細胞ヲ以テシ,結膜及ビ角膜ノ上皮細胞層ト相連續ス.

脂肪染色反應

確子體內及ビ水晶體周圍ノ繊維機組織ハ「ズダン」ニョリ瀰蔓性同質性ニ黃赤色ヲ呈ス、虹彩尖端部ョリ水晶體前面ニ至ル繊維機組織ハ微ニ「ズダン」ニ染ミ且中ニ脂肪顆粒含有ノ組織球機細胞ノ存在セルヲ見ル、虹彩基質ノ表層及ビ中心部ニ於テ限局性ニ「ズダン」赤染ノ顆粒狀物ノ集合ヲ見ル、顆粒ハー部細胞内ニ、一部遊離シテ存スルモノノ如シ、恐ク是レ虹彩筋ノ原基ナルベシ.

角膜上皮細胞基底部、瀰蔓性黃赤色ニ染ミ帶狀ヲ呈ス、實質内ニハ「ズダン」染色物質ヲ見ズ・眼瞼及ビ其ノ連續タル頭部ノ皮下組織ハー標ニ瀰蔓性黃赤色ヲ呈シ、深部ニ於ケル中胚葉性組織、瀰蔓性浸潤ノ外ニ多數ノ脂肪顆粒含有ノ細胞ヲ見ル、此等ノ細胞ハ一部ハ組織球細胞ニシテ一部ハ結締織滎細胞ナリ、

網膜ハ其ノ內層即チ神經繊維層及ビ節細胞層等ノー標ニ微ニ赤褐色ニ染メル外,別ニ帶褐赤色ノ空胞 標又ハ顆粒狀物ノ比較的多數ニ存在セルヲ見ル,外 層及ビ中間層ニ於テモ其ノ存在ヲ見ザルニアラザル モ內層ニ比シ遙ニ少シ,此等ノ物質ハ獨リ網膜ニ於 ケルノミナラズ,水晶體、豚絡膜及ビ自他ノ眼組織 ニモ稍を多數ニ發現ス、豚絡膜基質中部位ニヨリ著 シク「ズダン」赤染ノ部アリ,是レ專ラ血管內容ノ染 色ニヨルモノナリ、 上記「ズダン」染色空胞狀又へ顆粒狀物質ハ「ニルブラウ」ニョリテ又著明ニ濃青色ヲ呈シ各組織内ニ多數ニ發現ス、殊ニ網膜ニ蓄シク內外兩層ニ夥シ、而シテ此物質ハ後極方面ニ在リテハ內層ニ多ク末梢部ニ至レバ寧ロ外層ニ多キガ如シ、硝子體内ニハ此種物質ノ存在ヲ見ズ、豚絡膜及ビ其ノ外側中胚葉組織内ニハ稍々多數ニ存在ス、水晶體皮質及ビ中心部ニハ之ヲ見ザルモ上皮細胞層ニハ少數ニ之ヲ認ム・角膜實質立ニ上皮層共ニ其ノ發現ヲ見ズ、虹彩及ビ毛球體實質内ニハ稍々其ノ存在ヲ見ルモ上皮細胞内ニハニヲリス、眼瞼皮下組織内ニハ可ナリ著明ニ其ノ存在ヲ認ム・

重屈光性所見

軍屈光性物質ノ發現愈々多キヲ加へ總テノ組織內 ニ多數ニ存在ス.

角膜實質及ビ上皮細胞内ニハ多數ノ小針狀結晶ヲ 見、其ノ連續組織タル鞏膜繊維樣部及ビ結膜下組織 中亦無數ノ小結晶ヲ見ルモ軟骨樣鞏膜ニハ全ク其ノ 出現ヲ認メズ,水晶體ニ於テハ殊ニ赤道部皮質ニ多 ク往々集團樣大結晶塊ヲ現ス、中心部ニ於テハ只稀 ニ小ナル針狀結晶ヲ見ルノミ。

網膜ニ於テハ主トシテ內層=多ク往本集團樑結晶 塊ヲ形成セリ、外層及ビ中間層亦可ナリ蓍明=大小 ノ結晶ヲ見ル、色素上皮細胞及ビ豚絡膜基質內ニ於 テモ多數ノ小針狀若クハ顆粒狀ノ重風光性物質ヲ見 ル、硝子體腔ニ於テモ稀ニ網膜ニ接シ小ナル重屈光 性物質ヲ認ムルモ果シテ固有ノ硝子體組織內ニ存セ シモノカ、或ハ網膜細胞內ニ存セシモノガ偶を硝子 體內ニ融出セシモノナルカ聊分明ヲ缺クモ恐ラク後 者ナルベキカ、視神經繊維中ニハ蓍シク大型ノ結晶 塊ヲ多數ニ發現セルモ、固有ノ乳頭部ニハ甚稀ナリ、 「ベクテン」組織內ニモ其ノ量ハ未ダ甚少キモ確ニ小 針狀重屈光性物質ノ存在ヲ認ムルヲ得タリ・

孵化第9日

網膜ハ漸次其ノ層ノ區別分明ナルニ至レリ、 卽チ

後極方面ニ於テ節細胞層ノ外側ニ於テ未ダ非薄ナル | モ明ニ内網狀層ノ形成ヲ認ムペク,詳言スレバ節細 胞層ト其ノ外方ニ鬆疎ニ配列セシ數層ノ細胞トノ相 對向セルモノガ各突起ヲ出シテ相交錯シ茲ニ繊維様 構造ヲ有セル 1 層ノ組織ヲ形成スルニ至ル, 而シ テ此網狀層構成ニ與レル外側ノ細胞群ハ母細胞群ト 相開離シ、細胞間互ニ突起ヲ出シテ相交ハレル光景 甚明ニ, 之等細胞ハ漸次核ヲ失ヒツツ自ラ内網狀層 内ニ融合スルモノノ如シ・以上ノ關係ハ末梢部ニ於 テハ尚ホ未が明ナラザルモ其ノ分化ノ途上ニアルモ ノナルハ容易ニ認メ得ラルペシ、外網狀層ノ形成亦 同様ノ方法ニョリテ行ハレ、外顆粒層ヲ形造ル1群 ノ細胞ハ内位ノ細胞群トノ間ニ狹キ間隙ヲ生ジツ ツ、相對向セル細胞間ニ互ニ突起ヲ出シテ相交錯セ ルノ狀ヲ認ムベク、之ト同時ニ外顆粒層ノ細胞ハ外 境界膜ノ彼方ニ突起ヲ派出スルヲ見ルベシ,是レ卽 チ後日視細胞ヲ形成スペキ原基ナリトス、之等ノ戀 化ハ前 述ノ如ク後 極方 面ニ於テ最 著 明ニ觀 察スル ヲ得ペク,末梢部ニ至ルニ從ヒ漸次不明ニシテ Orra terminalis ニ近キ部ニ在リテハ分化ノ程度著シク遲 延シ,未ず節細胞層ヲスラ區別シ得ザル狀態ニ在リ.

虹彩及ビ毛機體ノ發育ハ前日ニ同ジク循ホ基幼稚 ナルモ虹彩裏面ノ皺襞及ビ毛様突起ハ既ニ形成サル ルコト前既ニ述ベタリ. 色素上皮細胞ノ空胞, 虹彩 筋原繊維等亦前日ノ狀態ト略ポ相同ジ

「ベクテン」を漸次其ノ長ヲ増スモ未ダ單一ノ突起 様形狀ヲ呈スルニ止り其ノ構造亦前日ト異ラズ.

水晶體, 角膜及ビ鞏膜等ノ狀況亦前日ニ同ジ.

脂肪染色反應

眼瞼及ビ頭部ノ上皮細胞及ビ皮下組織ノ「ズダン」 染色甚著明ニ,眼球結膜上皮細胞層内ェハ稍々多數 ノ脂肪顆粒含有ノ遊走細胞ヲ見ル. 角膜上皮細胞亦 「ズダン」ニ微ニ染色ス. 角膜資質ハ「ズダン」赤染ノ 彌蔓性乃至顆粒狀脂肪物質ノ存在ヲ見ザルモ帶赤褐 色ノ顆粒若クハ空胞ハ多少之ヲ認ムベシ,虹彩遊離

端ョリ水晶體ニ向へル繊維機組織, 虹彩ノ末端及ビ中央部⇒於ケル「ズダン」赤染顆粒ハ前日ト同ジク著明ニ之ヲ見ルベシ.

水晶體及ビ網膜ニ於テ帶赤褐色顆粒狀若クハ空胞 様物質ハ前日ト同ジク多數ニ存在シ、網膜ニテハ主 トシテ內外兩層ニ、水晶體ニ在リテハ上皮層下殊ニ 赤道部ノ皮質中ニ夥シ、硝子體ハ著シク黄赤色同質 性ニ染ミ、細胞性成分ヲ見ズ、豚絡膜ハ上記ノ顆粒 ヲ含ムコト稍々少ク、鞏膜軟骨部ニ於テハ只極メテ 稀ニ軟骨細胞中ニ之ヲ見ル、但シ軟骨部ニ於テモ「ニ ルブラウ」染色ニョレバ此種顆粒ノ發現稍々著シ、 繊維様鞏膜部ニハ著明ニ存在ス.

「ニルブラウ」 漁青ノ顆粒ハ「ズダン」染色顆粒ニ比シ何レノ部ニ於テモ著シク判明且多數ニ發現スルモ獨リ水晶體ニ於テハ稍々少シ、色素上皮細胞ハ此頃ヨリ僅微螺旋ノ 同轉ニョリ少シク紫紅色ノ色調ヲ反映ス、角膜及ビ眼瞼ノ上皮細胞ハ「ニルブラウ」ニョリ著シク青染ス、角膜貫質ニハ上配顆粒狀物ハ稀ニ、眼瞼基質ニハ甚多數ニ發現ス・

重屈光性所見

角膜, 鞏膜繊維様部, 虹彩及ビ毛樣體等即前眼部 組織ニハ比較的小型ノ針狀結晶殆ド無數ニ發現ス, 而シテ上皮細胞タルト實質組織タルトヲ問ハズー樣 ニ分布出現ス.

網膜ニ於テモ亦前日來ト同ジク著明ニ發現シ,多 クハ大型結晶塊トシテ內層及ビ外層ニ著シク中間層 ハ比較的少シ,色素上皮細胞内ニハ點々存在ヲ見ル モ硝子體腔ニハ之ヲ見ズ・水晶體ニ於テハ上皮細胞 内及ビ赤道部皮質ニ稍々多ク之ヲ見ルモ中心部ニハ 甚少シ,只稀ニ小點狀ノモノヲ見ル等總テノ狀况亦 前日ト大差ナシ・

孵化第 10 日

發育漸次進ミ此頃ニ至レバ各組織ノ發育略ポ完成 ニ沂ヅク・

角膜上皮細胞ハ1層又ハ2層ノ骰子形細胞ノ上ヲ

更ニ1層ノ扁平細胞ニョリテ被ヒ、B氏質モ亦略ポ 判然之ヲ區別スルヲ得ルモ、D氏膜ハ未ダ之ヲ區別 スルヲ得ズ.(「フランツ」ニョレバ鳥類角膜ニ於テ ハB氏膜ヲ認メズト云フモ、余ノ見ル處ニョレバ慥 ニB氏膜ヲ區別スルコトヲ得ベク、殊ニ燕ノ如ギハ 甚著明ナリトス.) 上下眼瞼ハ可ナリ發育ヲ來セル モ尚ホ兩者ノ間稍々相隔リテ對向セリ、虹彩筋繊維 ノ原基可ナリ著明ニ識別スルヲ得ベシ、虹彩及ビ毛 像體基質中ニハ部位ニヨリテ色素顆粒ノ發生ヲ見. 同時ニ虹彩後面ノ圓柱狀上皮細胞モ亦色素ノ發生ヲ 見ル.

網膜ノ分化狀況亦幾分前日ニ比シテ進メリ、曩ニ 内網狀層ノ外側ニ在リテ節細胞層ト相對セル1群ノ 細胞ハ今ヤ内網狀層ノ其ノ厚徑ヲ増スニ從ヒ自ラ其 ノ層內ニ捲キ込マルルガ如キ狀態ヲ呈スルニ至ル、 外網狀層ヲ挟デ外顆粒層細胞ト相對セシ1列ノ細胞 群モ亦同樣ノ機轉ニヨリ自ラ外網狀層形成ニ加ハル ヲ見ル・而シテ外顆粒層細胞ハ其ノ數ヲ減ジ2列又 ハ3列トナル・視細胞ノ發育ハ前日ト差異ヲ見ズ、 「ベクテン」ノ形態亦前日ト差異ヲ見ズ、 民其ノ冠 状部ヨリ硝子體ニ向ッテ著明ニ繊維様物ヲ派生セル ヲ見ルベシ

脂肪染色反應

皮膚ニ於ケル脂肪沈着益々増多ス. 眼球各部/脂肪染色前日ト異ラズ, 只眼瞼及ビ角膜上皮/表面ニ「ズダン」赤染/顆粒相連リテ薄層ヲ形成セルヲ異レリトス, 皮膚ニ於ケル薄層ハ恐ラク表層上皮細胞/角化ニヨルナルベシ,「ベクテン」ハ神經繊維ト同ジク淡ク「グリア」組織ノ染色ヲ呈ス.

前日及ビ前々日ノ標本ニ於テ見シ「ズダン」及ビ「ニルブラウ」染色ノ顆粒状物ハ此日ニ至リ著シク減少ス、即チ網膜ニテハ視神經進入部及ビ内層ニ尚ホ可ナリ存在セルモ他ノ部ニハ只僅ニ點在スルニ過ギズ、水晶體及ビ角膜等ニハ殆ド之ヲ見ズ,只虹彩,毛機體及ビ転終障ニハ統本比較的名々フラをスー確子

體ノ同質性染色微ニ淡紫紅色ヲ呈ス· 鞏膜軟骨亦紫 寄色ヲポブ・

重屈光性所見

角膜寶寶、上皮細胞及ビ內皮細胞等ニ於テ其ノ發現ヲ見ルモ比較的少ク、虹彩及ビ毛樣體ノ方遙ニ著明ニ發現ス、水晶體ノ重風光性物質ハ前日來ノモノト同ジク繊維ノ走行ニ一致シ皮質及ビ中心部ニ於テ共ニ稍々長キ線狀ヲナシテ現ルルモ其ノ數比較的少シ、色素上皮細胞內ニモ亦點々出現ス、

最著明ニ發現スルハ依然網膜組織ナリトス・其ノ 發現ノ狀況ハ前日來ト同樣主トシテ內外層ニ多ク, 中間層ニハ稍々少シ,內層ノモノハ屢々述ペタル如 ク集團樣ヲナセル大型ノモノヲ多シトス・ 豚絡膜組 織中亦夥シク小針狀結晶ヲ見ルモ軟骨鞏膜部ニハ之 ヲ見ズ・視神經繊維内ニハ多數ノ集團的結晶塊ヲ含 ミ,「ベクテン」内ニハ少數ノ小針狀若クハ小顆粒狀 電風光性物質ヲ認ムベシ・

孵化第11日

網膜ハ其ノ分化ノ進ムト共ニ其ノ細胞列ハ却テ其ノ敷ヲ減少シ,且甚密ニ存在セシ中央部ノ細胞核モ漸ク其ノ配列稍々鬆竦トナル,視細胞層ハ漸次其ノ形成ヲ初ム、「ペクテン」モ亦稍々發育シ既ニ單一ノ突起狀ナリシ者變ジテ蛇行標トナリ硝子體中ニ挺進セリ、「ペクテン」中ニ存スル色素顆粒ハ黑色小圓形ニシテ主トシテ組織ノ表層ニ存ス.

虹彩,毛機體,角膜及ビ水晶體ノ狀態略ポ前日ト同ジク, 豚絡膜ハ漸ク其ノ層ヲ厚クシ血管腔著シク 擴大ス.角膜水晶體間ノ空隙即チ前房内ニハ硝子體 腔ニ於ケルト同ジク繊維機網狀組織ヲ容ル.色素上 皮細胞内ノ色素ハ前述ノ如ク後極方面ニ於テハ短桿 狀ヲ呈シ前方ニ於テハ顆粒狀ヲ多シトス.

脂肪染色反應

可ナリ存在セルモ他ノ部ニハ只僅ニ點在スルニ過ギ 角膜質質ノ表層微ニ「ズダン」ノ色ヲ取ル、眼球結 ズ・水晶體及ピ角膜等ニハ殆ド之ヲ見ズ,只虹彩,毛 膜上皮及ビ結膜下組織ニ於テ多數ノ脂肪顆粒ノ存在 樣體及ビ豚絡膜ニハ猶ホ比較的多ク之ヲ存ス、硝子 ヲ見、一部ハ細胞内ニ一部ハ遊離シテ存在ス、虹彩 ノ字胞様物ヲ見ル外脂肪染色ナシ、前房及ビ硝子體 内ニ微黃赤色同質性物質ノ存在ヲ見ルコト前日來ニ 同ツ.

網膜ハ漸次各層ノ區別サルルニ至ルト共ニ繊維様 層ハ「ズダン」ニヨリテ稍々帶赤ニ染ミ且極メテ稀 ニ脂肪顆粒含有ノ遊走細胞ヲ認ム、但シ其ノ所在ハ 一定セズシテ內外層若クハ中間層ニ出現ス、前日來 稍々減少ノ傾向ニアリシ空胞様乃至顆粒狀脂肪物質 ハ尚ホ少量ニ存在ス、「ペクテン」ノ頂部ニ於テ著シ ク赤染セル脂肪様物質ノ出現アリ, 又此者ト別ニ頂 部血管腔内容ニモ亦脂肪顆粒ノ赤染セルヲ見ルベシ 此等ノ物質ハ日ヲ經ルモ其ノ出現ニ著シキ消長ヲ見 ズ・ 豚絡膜組織ハー様ニ微黄赤色ニ染ムモ軟骨標業 膜部ハ極メテ幽微ニ「ズダン」ノ色ヲ取ルニ過ギズ, 眼球後部ノ結締織及ビ頭部皮下組織内ニハ遊離セル 脂肪顆粒ノ外極メテ多敷ノ組織球細胞及ビ結締織細 胞ノ脂肪顆粒ヲ含有セルモノヲ認ム.

「ズダン」染色成績ト稍々異り「ニルブラウ」染色ニ ヨレバ鞏膜軟骨部ハ其ノ基質ハ著明ニ「ヴイオレツ ト」ニ染ミ、細胞ハ濃青顆粒狀ニ染色ス、硝子體腔 ノ淡紫紅色ヲ呈スルコト前日ニ同ジ、網膜内外層ニ ハ濃靑色ノ空胞様若クハ顆粒狀物質猶ホ著シク存在 シ、豚絡膜亦此物質ヲ含メル外一般ニ濃青色ニ染ミ 且部位ニョリテ幾分紫紅色ヲ帶ブ、角膜表層ノ微 ニ「ズダン」ニ染色セシ部及ビ上皮細胞層ハ「ニルブ ラウ」ニヨリテ稍々靑色ニ染ミ且幾分顆粒狀ヲ呈ス. 水晶體ハ其ノ上皮細胞殊ニ赤道部ノモノ强ク靑染シ 且皮質ニ於テ少量ノ顆粒狀物ヲ見ル.

重屈光性所見

角膜質質ニ發現スル重屈光性物質著シク減少シ, 只上皮細胞層ニ稍々多數ニ存スルヲ見ル, 結膜及ビ 鞏膜繊維樣部ニハ著明ニ發現ス, 網膜ノ結晶ハ前日 來ノモノト異リ結晶塊ヲ形成セズシテ小針狀ヲ呈シ 内層及ピ外層ニ於テ稍々層狀ニ配列ス,「ペクテン」| 面, 水晶體上皮細胞殊ニ赤道部上皮細胞内等ニ稍々

筋繊維亦著明ニ「ズダン」ニ赤染ス・水晶體ニハ少數 | 體部ニ於ケル重屈光性物質ノ發現漸ク著明ナリ・自 餘ノ部分ニ於ケル重屈光性所見ハ前日ニ異ラズ.

孵化第 12 日

發育上前日ト大差ナシ, 但シ此頃 = 至レバ網膜ノ 各層漸ク其ノ殺育ヲ完成スルニツレ、其ノ細胞ハ初 期ニ於ケルガ如ク緻密ニ配列セズシテ稍々鬆疎トナ リ、後極方面ニ於ケル內顆粒層(成長動物ノ同層ニ 比シ細胞/配列循ホ甚多キモ) ニ在リテモ核/形狀 漸次圓ミテ帶ビ且互ニ突起ヲ出シテ相交ハレル狀態 比較的明瞭ニ見ルヲ得ペシ、而モ末梢部ニ於テハ其 ノ層循ホ混沌トシテ僅ニ節細胞層ヲ區別シ得ル程度 ニ止ル、從テ自餘ノ細胞核ハ初期ニ於ケルガ如ク依 然紡錘形又ハ橢圓形ヲ呈ス、視細胞ノ核卽チ外顆粒 層ノ核ハ略ボ2列ニ相並ペリ.

脂肪染色反應

一般ニ皮下組織!脂肪沈着益々著明トナル、但シ 眼瞼皮膚へ附近ノ皮膚部ニ比シテ脂肪沈着著シク少

・ 網膜へ前日ノ項ニ述ベシガ如ク内層即チ神經繊維 層、節細胞層及ビ内網狀層並ニ外網狀層(僅ニ其ノ 存在ヲ認ムルニ至ル)ニ於テ幾分「ズダン」染色ヲ見 ルモ顆粒狀脂肪物質沈着ヲ見ズ、「ペクラン」體內亦 脂肪顆粒ヲ認メズ、之ニ反シ豚絡膜ハ瀰蔓性「ズダ ン」ニ染メル外往を其ノ基質ニ於テ顆粒狀脂肪ノ存 在ヲ見ル、毛樣體ニハ脂肪顆粒含有ノ組織球樣細胞 著明ニ存在ス、虹彩ニハ此種細胞ノ存在ヲ見ザルモ 筋繊維內脂肪顆粒 ハ著明ニ之ヲ證明ス・角膜ハ表層 依然幽微ニ染ミ且內皮細胞ノ內面ニ多數ノ脂肪像物 質ノ沈着アリ,水晶體ニハ脂肪機「ズダン」染色ヲ見 ズ, 空胞ハ尚ホ可ナリ多數ニ存在スルモ染色淡シ. 硝子體及ビ前房內ノ同質性染色前日ノ如シ.

「ニルプラウ」染色ニヨル濃青色顆粒狀物ハ此日! 標本ニ於テモ網膜ノ內外層竝ニ「ペクテン」組織内ニ 多量ニ存在シ、其ノ他眼瞼及ピ角膜上皮細胞層ノ表 多數ニ存在セリ・豚絡膜,鞏膜繊維標部,結膜下組 | 至レリ・ 織等亦名量ノ此種顆粒ヲ含有セリ.

重屈光性所見

角膜寶質ニ於ケル重屈光性物質ハ邊緣ニ於テハ稍 名キモ中心部ニテハ少數ニ散在スルニ過ギズ,上皮 層ニハ可ナリ著明ニ點々存在ス. 眼瞼基質ニ於テハ 角膜ニ比シテ海ニ多シ、之等ノ部ニ發現スル重屈物 質ハ主トシテ小針狀結晶又ハ小顆粒狀結晶ニシテ溫 ニヨリテ消失シ,再生セルモノハ多ク定型的十字交 叉ヲ呈ス.

水晶體ニ於ケル發現ハ專ラ上皮下殊ニ赤道部ニ於 ケル上皮層下ニ現レ,中心部ニハ少シ,而シテ多ク ハ線狀ヲナシテ發現スルコト既ニ塵々述ペタルガ如

網膜ニ於テモ甚著明ニ發現シ各層ニ亙リテ稍々層 狀ニ現ル. 脉絡膜, 虹彩及ビ毛様體ニ於テモ亦著明ニ 之ヲ見ル, 一般ニ葡萄膜系統及ビ網膜ニ於ケルモノ ハ角膜及ビ眼瞼等ノモノニ比シ結晶稍々大ナル針狀 ヲ呈ス、色素上皮細胞ハ網膜部ニ於テモ毛樣體部ニ 於テモ點々細胞内ニ發現ヲ見ルモ其ノ數多カラズ.

孵化第13日

視細胞原基比較的發育シ個々ノ存在稍々明ニ之ヲ 認ムベク、多クハ扁平「コルベン」狀ヲナセリ、而シ テ視細胞ノ核部ハ更ニ外網狀層ニ向ヒテ著明ニFuss ヲ出セルノ狀比較的鮮明ニ之ヲ認ムルヲ得ペシ,「ペ クテン」亦著シク伸長シ數囘旋轉蜿蜒セリ、網膜ノ 各層漸次進化シ末梢部ニ於テモ明ニ節細胞層ノ外、 内網狀層及ビ內顆粒層ヲ區別シ得、但シ外網狀層及 ビ外顆粒層ハ最末梢部ニ於テハ尚ホ未ダ十分ニ之ヲ 區別シ得ペカラズ、視細胞亦該部ニ於テハ未ダ其ノ 形成ヲ完了セズ,要スルニ極メテ末梢部ヲ除ク外, 網膜各層ハ此日ヲ以テ殆ド完成セラルルニ至レリ.

脂肪染色反應

前日ニ比シ特ニ差異アルヲ見ズ・只比較的著明ニ

電屈光性所見

電屈光性所見亦前日ニ比シ略ポ相同ジク各組織共 ニ著明ニ重屈光性物質ヲ含ム・

第11日ノ頃ヨリ僅ニ羽毛ノ競生ヲ認メタリシガ 此日ニ至リ漸ク其ノ敷ヲ増シ、且其ノ細胞内ニ重屈 光性物質ノ發現ヲ見ル・

孵化第14日

虹彩及ビ毛様體ノ筋繊維可ナリ著明ニ發着ヲ來タ シ、或ハ輪狀或ハ車軸狀ヲナシテ存在セルヲ見ル、 同様ニ眼瞼ニ於テモ筋繊維ノ存在漸ク明ニ見ルヲ得

角膜、B氏膜及ビD氏膜亦稍々明瞭ニ區別シ得べ シ,網膜ノ發育前日ト同ジ.

脂肪染色反應

皮膚及ビ皮下組織ニ於ケル脂肪沈着ハ逐日顯著ナ ル増加ヲ示スモ眼球ニ於ケル脂肪及ビ類脂肪沈着ハ 前日來サンタル差異ヲ見ズ、豚絡膜基質、網膜ノ内 網狀層等「ニルプラウ」ニヨリ幾分帶紫淡靑色ニ染ム コト硝子體腔ト同ジ,但シ網膜及ビ豚絡膜等ニ多數 **愛現セシ「ニルプラウ」好染ノ顆粒狀物ハ前日來著シ** ク減少シ此日ノ標本ニ於テハ殆ド之ヲ見ザルニ至レ リ, 但シ網膜視細胞層 = 「ニルブラウ」ニ 濃青染色ノ 脂肪小顆粒ノ存在ヲ見ル.

重屈光性所見

眼球各部ニ於ケル上記「ニルブラウ」靑染顆粒狀物 質ノ殆ド存在ヲ見ザルニ拘ラズ重屈光件物質ハ眼球 各組織ニ於テ殆ド例外ナク甚多數ニ發現ス,殊ニ兩 3 日來發現ノ甚少カリシ角膜實質ニ於テモ亦多數ノ 小針状結晶ヲ見ル,但シ上皮細胞層ニハ只稀ニ其ノ 存在ヲ見ルノミ、虹彩及ビ毛様體基質内ニモ同ジク 著明ニ小針狀結晶ヲ見、其ノ上皮細胞内亦點々之ヲ 認みペシ.

網膜ニ於テハ前日ト同ジク略ポ層狀ヲナシ、殊ニ 存在セシ「ニルプラウ」染色顆粒モ著シク減少スルニ|内外網狀層ニ著シク,兩層ハ殆ド一條ノ線狀又ハ紐 狀ヲ呈セリ、視細胞層ニモ亦小ナル結晶稍々多數ニ | ハ更ニ第3 眼瞼ノ表面ニ移行スレバ再ビ其ノ高サラ 出現スルニ至ル、水晶體ノ重屈光性物質ハ依然トシ テ線狀ヲ呈シテ繊維間ニ現ル、眼瞼皮下組織中ニハ **多量ノ小結晶ヲ見、羽毛ノ毛根細胞内ニモ亦點々小** 結晶ノ存在ヲ見ル.

孵化第15日

「ペクテン」著シク發達シテ旋轉 5,6 囘,蜿蜒トシ テ硝子體中ニ挺出セリ, 而シテ末端ニ Hütchen ヲ頂 キ、多數ノ血球ヲ保有ス、色素顆粒ハ末端ニ於テ多 量ニ沈着シ、日常ニ組織ノ外表ニ多キコト前既ニ述 ペシガ机シ.

網膜ハ既ニ其ノ發育完成シ、各層ノ區別へ末梢部 ニ於テモ稍々明瞭ニシテ、視細胞ノ形成亦漸次進化 ス、網膜視部ト網膜毛樣部トノ境界, 所謂Orra terminalis ニ於ケル細胞ノ急激ナル變化ハ既ニ第11日ノ 標本ニ於テ明ニ之ヲ認メタリシガ、當時此部ニ於ケ ル網膜組織ハ只 1,2 ノ層ヲ區別シ得ルニ過ギザリシ コト亦既沭ノ如シ、此日ニ至レバ網膜各層ノ狀態全 ク成熟動物ニ同ジク、從テ此部ニ至ル迄明ニ之ヲ識 別シ得ルニ至ル.

角膜上皮の増殖シテ3.4層ノ骰子形細胞ヨリナリ 表層ニ至ルニ從ヒ扁平トナリ不規則ニ配列ス, D氏 膜ハ「ヘマトキシリン. エオジン」染色ニテハ漸ク其 ノ存在ヲ認メ得ルニ過ギザルモ「ニルブラウ」染色標 本ニ於テハ比較的明瞭ニ之ヲ區別シ得ペシ・

上下眼瞼發育シテ殆ド相接スル程度トナリ、上皮 細胞層ハ短圓柱形ノ基底細胞ノ上ニ明朗ナル圓形ノ 核ヲ有セル骰子形細胞ノ1層ヲ重ネ、更ニ扁平ナル 核ヲ有セル扁平細胞ヲ被リ,其ノ外表ニ「エオジン」 濃染ノ非薄ナル角化層ヲ有ス、此部ニ於テハ「エラ イヂン」顆粒ノ存在ヲ見ル、此狀態ハ眼瞼遊離緣ヲ 越エテ結膜面ノ一部ニ及ブ、從テ結膜面ニ於ケル細 胞列ハ遊離緣ニ近キ部ニ於テハ眼瞼皮膚ニ同ジク, 漸次穹窿部ニ近クニ從ヒ細胞ノ高サト其ノ配列ヲ減 ジ. 縁ニ冨平ナル細胞 / 1, 2層トナル, 此細胞列 | 於ケルト同様ナリトス・而シテ孵化期又ハ胎牛期ニ

増シテ圓柱状上皮細胞トナリ、裏面ヲ被ヘルモノハ 更ニ其ノ高サヲ減ジ骰子形乃至扁平上皮細胞ニ移行 ス.

脂肪染色反應

眼球各部ノ脂肪染色反應ハ2,3日來殆ド差異ヲ見 ズ.

重屈光性所見

重屈光性物質へ前日來ト同ジク極メテ豐富ニ發現 ス,爲ニ眼球及ビ附屬器ノ各組織ハ悉ク「コレステ リンエステル」ヲ以テ充満セルガ如キ觀アリ, 一時 其ノ發現ノ殆ド消失セシカニ見エシ角膜實質ニ於テ モ1,2日來再ピ多數ノ小針狀結晶ヲ見ルニ見ル、「ペ クテン」内ニモ漸次著明ニ小針狀結晶ヲ出現ス.

孵化第16日

眼瞼及ビ角膜ノ狀況前日ニ同ジ.

網膜視細胞ハ更ニ發育ヲ加へ、後極方面ニ於テハ 殆ド成熟動物ニ近似ノ狀態ニ淮ム, 但シ末梢部ニテ 八猶ホ甚幼弱ナルヲ免レズ、色素上皮細胞内ノ色素 顆粒ハ部位ニヨリ色素移動ニ類セル所見ヲ呈セルヲ 見ル(卵殻内ニ於ケル「エンブリオ」モ此時期ニ至レ パ光線ノ刺戟ニ應ジテー種ノ反應ヲ呈スルニ至ルモ ノカ), 豚絡膜ハ此頃ニ至ルモ猶ホ色素ヲ發生セズ.

脂肪染色反應

前日來ト別ニ特異ノ染色ヲ見ズ.

重屈光性所見

大小無數ノ多クハ針狀ヲ呈セル結晶眼球ノ各組織 ニ競現スルコト從來ノ例ニ同ジク、本例ニ於テハ特 ニ角膜上皮ノ表層及ビ角膜内皮細胞ト虹彩トノ間隙 (切片ノ收縮ノ間ニ兩者相密接)ニ蓍明ニ重屈光性ヲ 放ツ、其ノ他ノ組織ニ於テモ悉ク著明ニ針狀結晶ヲ 認ふ. 之等ノ結晶ノ熱ニョリテ忽チ消失シ、冷ユル ニ從ヒ蓍明ニ再現シ、再現セルモノハ稍々其ノ形ヲ 小ニシ定型的十字形交叉像ヲ呈スルコト亦各時期ニ

見ル「コレステリンエステル」ノ結晶(液狀結晶ニア|キ其ノ中ニ甚少ナル點狀重屈光性物質ヲ認ム,豚絡 ラズ) ハ多クノ場合成熟動物眼球ニ於ケルヨリモー 般ニ大ニシテ著シク識別シ易キヲ常トス、此關係ハ 又家東ニ於テモ同様ナリ.

孵化第17日

網膜各層略ポ完成セルモ只內顆粒層ノ核ハ成熟動 物ノ網膜ニ於ケルヨリモ其ノ敷尚ホ甚多シ、但シ核 ハ殆ド皆圓形ヲ呈シ初期ニ於ケル如ク橢圓又ハ紡錘 形ヲ呈セザルコトハ前既ニ述ペタル所ナリ.「ペクテ ン」モ更ニ其ノ形ヲ大ニシ、旋轉7,8囘ニ及ビ、頂 部ニ至ル程濃厚ニ色素顆粒ヲ含有ス.

豚絡膜ハ視神經進入部附近ニ於テ色素顆粒ヲ有ス ルニ至ル.

脂肪染色反應

網膜ノ發育漸次成熟動物ニ近ク從テ脂肪染色亦成 熟動物ニ同ジク、繊維様層創チ内外網狀層及ビ神經 繊維層等皆「ズダン」ノ色ヲ取ル,脉絡膜ハ蓍明ニ 「ズダン」=染ミテ赤色ヲ呈ス、コノ赤染ハ獨リ血管 腔内容ノミナラズ,間質結締織内ニモ多量ノ赤色顆 粒ヲ含有セルニョル, 顆粒ハ獨リ組織球樣細胞內ノ ミナラズ又結締織細胞内ニモ包含セラル. 毛镁體及 ビ虹彩筋繊維亦著明ニ「ズダン」染色脂肪障顆粒ニ富 ム,鞏膜ノ軟骨部ハ依然「ズダン」染色=與ラズ,軟 骨部ヨリ前方ニ位セル覆瓦様骨組織部ハ此日ノ標本 ニテ稍々著明ニ石灰化セルヲ見ル.

眼瞼上皮細胞ハ瞼緣ニ近キ外皮側及ビ遊離緣部ニ 於テ獨リ表在ノモノノミナラズ基底細胞モ亦著シク 「ズダン」ニ赤染シ眼瞼ハ恰モ赤色ノ層ニヨリテ緣取 ラレタルガ如シ,「ニルブラウ」染色モ亦特ニ前日來 差異ヲ認メズ,鞏膜軟骨部ハ削述ノ如ク著明ニ「ヴ イオレツト」ニ染ムモ,骨樣部ハ殆ド染色セズ.

重屈光性所見

一般ニ重屈光性物質少シク減少シ且其ノ形モ小ト

膜ニハ循ホ可ナリ多數ノ稍々大ナル重屈光性物質ヲ 發見ス. 眼窩内ニ見ル腺機組織及ビ眼球外方ノ結締 織内ニハ猶ホ著シク多數ノ針狀又ハ顆粒狀結晶ヲ見

水晶體繊維間ニハ此頃ニ至リ「ズダン」ニョリ帶赤 褐色ニ染メル微細顆粒ノ存在ニヨリ幽微ナルモ稍々 太キ線狀ヲ呈スルヲ見ル、而モ此顆粒様物質ニ相常 スル部ニハ重屈光性ヲ呈セズ、從テ水晶體トシテハ 前面上皮細胞直下ニ 2,3 點狀/重風光性物質ヲ認ム ルノミ.

眼瞼上皮細胞ノ表層角化セル部及ビ瞼線、線間部 ハ細胞内並ニ眼瞼基質ハ共ニ稍々著明ノ重屈光性 「リポイード」ヲ有シ、角膜上皮及ビ實質内ニハ殆ド 之ヲ見ズ, 虹彩及ビ毛镍體ニハ其ノ形小ナルモ多數 ノ重屈光性物質ヲ認メ且部位ニョリ集合シテ存在 ス. 毛標體上皮細胞内ニモ亦點々之ヲ見ル. 鞏膜ノ 繊維模部及ビ球結膜組織内ニハ可ナリ多クノ重屈光 性物質ヲ含ム.

孵化第 18 日

發育狀態前日ト同ジ.

脂肪染色反應

此日ニ至リ初メテ視細胞内ニ油球ノ出現ヲ見ル, 但シ其ノ敷未ず甚少シ、油球ハ「ズダン」ニョリ赤染 「ニルブラウ」ニヨリ濃靑ニ染ム, 「ニルブラウ」染色 ノ方鮮明ニ見ユ.

電屈光性所見

是レ亦前日來ト異ル所ナシ.

孵化第 19 日

家鶏「エンプリオ」ハ家兎胎仔ニ比シ破殻直前ノ狀 態著シク成熟狀態ニ近似シ總テノ組織既ニ完成スル ニ至ル,而モ網膜ノ微細構造ハ嚴密ニ之ヲ成熟動物 ニ比スレバ循ホ幾分小異ナキニアラズ、創チ内顆粒 ナル,網膜內外網狀層ハ白色=光レル一條ノ線ヲ畵 | 層ノ細胞웗ホ少シク配列多キガ如ク,之ト同時=內

網狀層ノ厚徑稍を狹キガ如シ、視細胞層ハ略ボ成熟 動物ノソレト同一狀態トナリ脂肪染色上油球ノ數モ 前日ニ比シ幾分多數且明瞭トナル、「ペクテン」ノ狀 態モ略ポ完成ニ近ク回轉實ニ15,6回,色素ハ依然 圓形顆粒狀ニシテ好デ組織ノ外表ニ多シ、特ニ帽狀 部ニ於テハ基濃密ニ存在ス、硝子體繊維ハ初期ニ比 シ粗大トナル・

眼瞼上皮細胞ハ骰子形基底細胞ノ上ニ明朗ナル核 ヲ有セル 1,2 層ノ扁平細胞並列シ, 更ニ其ノ上ヲ 「エオジン」好染!角化層ヲ以テ被ヘリ、角化層ニハ 此日ノ標本ニ在リテハ「エライデン」顆粒ノ存在甚少 シ,基底細胞ハ瞼緣部ニ向フニ從ヒ漸次高徑ヲ加へ、 **緣間部ニ於テハ圓柱狀トナル、此部ニ於ケル中間細** 胞ノ核ハ圓形ニシテ「クロマチン」ニ<u>ラ</u>シク、又屢々 其ノ核ヲ失ヘルアリ, 結膜面ニ移行スル部ニ在リテ ハ往×胞體ニ空胞ヲ形成セリ. 結膜面ニ於ケル上皮 細胞ハ瞼縁ニ近キ部ニテハ圓柱狀若クハ骰子形ノ基 底細胞ノトラ2.3層ノ稽々扁平ナル細胞不整ニ前列 シ、穹窿部ニ近ヅクニ從ヒ漸次扁平トナリ且其ノ層 ヲ滅ズ.

脂肪染色反應

網膜ノ繊維様層及ビ視神經繊維ハ稍々「ズダン」ノ 色ヲ取リテ赤褐色ヲ帶ブ、視細胞内ノ油球前日ニ比 シ蓍シク判明ス殊ニ「ニルブラウ」染色ノモノ甚著明 ニ見ユ,「ペクテン」組織内ニハ魔々血管腔内容ヨリ スル「ズダン」赤染ヲ透見シ、豚絡膜亦血管内容及ビ 間質組織ニ於テ「ズダン」染色ヲ見ルコト前日來ノ例 ニ同ジ.

虹彩筋ハ瞳孔緣ニ近ク表在性ニ、中央部ニ於テハ 基質ノ中部ヲ輪狀ニ走レル繊維(括約筋)ト, 根部ニ 於テハ深部ヲ放線狀ニ走レル繊維(散大筋)等ヲ區別 シ得ペク, 何レモ著明ニ「ズダン」赤染ノ顆粒狀及ビ 滴狀ノ類脂肪ノ沈着ヲ見ル, 鞏膜繊維樣部亦多量ノ 類脂肪顆粒ヲ含ム、軟骨様部ノ「ヴィオレット」染色 幾分淡ク殊ニ後極方面ニ於テ然り,而シテ軟骨細胞 | 物質發現ノ狀況ニヨリ之ヲ表示スレバ下ノ如シ.

内ニ「ニルプラウ」染色ノ青色小顆粒比較的多數ニ存 在セリ.

眼瞼基質ハ遊離緣ニ近ク可ナリ多數ノ脂肪顆粒ヲ 見ル、上皮細胞層ハ角化セル表層ハ著明ニ「ズダン」 ニ染ムモ基底細胞内ニハ脂肪顆粒ヲ見ズ、而モ遊離 徐ニ近クニ從ヒ基底細胞內殊ニ基底部ニ多數ノ類脂 肪顆粒ヲ含有スルヲ見、更ニ遊離端ニ於テハ獨リ基 底細胞ノミナラズ中間細胞内ニモ「ズダン」赤染ノ顆 粒ヲ見、加之皮下組織亦一樣ニ瀰蔓性ニ赤色ヲ呈ス ルニ至ル、結膜面ニ於テモ緣間部ニ近キ數列ノ上皮 細胞ハ同ジク脂肪化ニ與リ胞體内ニ脂肪顆粒ヲ含有 +11.

角膜ハ其ノ上皮層ハ「ニルブラウ」ニョリ鮮明ニ靑 染シ、實質組織ハ脂肪染色ニ與ラズ、組織的ニモ繊 維板ハ著シク緊密トナリ、且核ノ數甚減少シ扁平細 長トナル.

重屈光性所見

眼瞼上皮層ノ角化セル部ハー條ノ光輝アル線狀ヲ 呈ス、間質内ニ少數ノ小針狀結晶ヲ見ルニ過ギズ、 角膜上皮細胞及ど實質内ニハ甚少數ノ點狀又ハ針狀 重屈光性物物ヲ認メ、虹彩、毛樣體及ビ鞏膜繊維樣 部ニハ稍々著明ニ針狀若クハ顆粒狀結晶ノ存在ヲ見 ル,水晶體ニハ甚少ク僅ニ前面及ビ後面ノ上皮層下 ニ少數點狀ノ重屈光性物質ヲ見ルニ過ギズ、赤道部 ニハ之ヲ見ズ.

網膜内ニハ依然多數/針狀結晶又ハ集團樣結晶塊 ヲ見, 層狀若クハ散在性ニ存在シ, 脈絡膜及ビ色素 上皮層ニハ小點狀若クへ小針狀結晶可ナリ夥シク散 在セリ、硝子體内ニハ涂ニ重屈光性物質ノ發現ヲ見 ズ、視神經繊維内ニハ稍々多數ノ「ペクテン」組織内 ニハ只少數ノ小針狀又ハ點狀、重屈光性性物質ノ發 現ヲ認ム.

上來述ベ來リシ所見ヲ脂肪染色反應及ビ重屈光性

備考 式 釵 ` 脂肪染色侧質 ₹ ۲ 黑 1] 灵好令监護 第 1 英

(一)陰性 (土)殆ドナシ (十)少量=存ス (H)著明=存ス (H)表著明=存ス		眼瞼角膜等ノ酸生未メン	角膜へ1層ノ上皮ト淡キ中胚葉性組織ニ 過ぎず	此頃ヨリ「ニルブラウ」 と 田ノ顆粒状物質出現シ初ム			整膜軟骨標部値メテ幽微=「ズダン」=染 ≤「ニルブラウ」=著シク「ヴイオレツト」 = 塾よ				角膜及ど結膜上皮ニ多敷ノ脂肪顆粒含有 ノ細胞 ラ 見ル	「ニルブラウ」青染ノ顆粒殆ド消失ス	- 副細胞ニニルプラウ」染色/脂肪顆粒様 ノモノラ目ル伯シ神軽ト、町扫塗アリ				
編集	「ペクテン」			1	1	+	+	+	+	+	+	+	ľ	1	ı	(恒 被 /) (脂肪染色)	「ズメン」染色、幽微「ニルブラウ」、箱々染色
	視神程			ı	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	
' 脂肪染色囫囵 / 飯塊	水晶體	ı	1	+	#	(赤道部) 皮皮質	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	水晶健上皮細胞族ニ赤道部「リングウルスト」、ハ「ニルブラウ」ニ濃青色ニ染よ「パダン」ニハ梨色と難ら
	色素上皮	ı				+			+	+	+						色素上皮層へ色素:被ハレ脂肪染色甚不明27日頃ョリ「ニルブラウ」「稍々紫赤色ニ染ム」
	網膜	ı	+	+	#	#	#	#	#	‡	十 網膜=少敏/脂 防顆粒細胞アリ	‡ <u>씨</u>	#	‡	+	+	
ニドケル	爾子體	+	+	‡	‡	#	- ボブシウ」- 淡紫色	#		‡	+	+	+	+	+	+	
泛	限結膜			(東河)	#	+ .	#	+	#	+	+	#	#	#	#	+	
湿	験事部				1	+	+1	+	+	+	+	+	+	+	+	+	主トシテ「ニルブラウ」染色
¢	牽機線維那				1	+	+		#	#	#	#	#	‡	#	+	<u> </u>
数は、対象	虹彩及毛镣體				十(筋繊維)	++(筋繊維)	+	#	#	#	#	‡.	‡	‡	#	#	
¥	<u> </u>				<u> ¥ </u>	±	+	#	#	+	+	+	#	‡	#	_‡_	
44	1 0 0 0 0 0 0 0 0 0 0 0 0 0 0 0 0 0 0 0		+		1	ı	#	層 配 場 場 手	+	1	ı	ı	1	1	ı	1	よへ何レノ場合モ大差ナシ此色調へ比表ニテヘ脂肪染色ョリ除外ス
	上度		+		+	+	++	+	+	+	#	+	1	1	ı	ı	角膜上皮細胞層ノ「ズダン」二種ノ白調ニ染
i	眼 瞼 上皮 基質	ググ	그	4	+	+	_ ‡	+	#	#	#	#	#	#	#	+ 1	〈第1日頃ョリ著明ニ發現ス
	B 上 及	政 版 米	匝		+	+	+	+	+	+	#	+	#	#	#	#	眼球結膜上皮細胞及ど結膜下組織ノ脂肪染合
8	部位 田敷	第5日	第6日	第7日	第8日	第9日	第10日	第11日	第12日	第13日	第14日	第15日	第16日	第17日	第18日	第19日	

第2表 眼球各組織ニ於ケル軍屈光性物質ノ發現

(一)殆ドナシ (十)少数ニ存ス (十)多数ニ存ス (卅)甚多数ニ存在ス

備布

					8,9両日頃ニテハ鞏膜軟骨標部僅=其發生ヲ認るル程度=シテ繊維標造構ノ部ト割然區別スペカラズ後テ曺風光性物質稍混在スルモノノ如シ								同一眼球ニテモ其ノ切片ノ異ルニ從ヒ重屈光性 物質ノ著シク多化ヲ県ルモノアリ			
~~~			1	+	+	+	#	#	#	#	#	#	+	+	+	「ペクテン」ニ 軍屈光性ヲ 見ル 八第8日ニ初マル
視神經		#	#	#	#	#	#	#	#	#	#	‡	#	+	+	
上水晶體	#	#	+	#	#	‡	+	#	+	+	#	+	+	+	+	主トシテ上皮細胞及皮質ニ多ク殊ニ赤道部皮質ニ著明ナパラ常トス
色素上皮細胞	#	#	#	‡	‡	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	
網膜	#	#	#	#	#	#	#	#	#	#	#	#	#	#	#	祝細胞 二重風光性ヲ認メ初ムルハ第5日ノ頃トス
硝子體	1	1	1	ı	l	ı	1	ı	ı	1	1	I	ı	1	I	領子體、「ズダン」ニョッ帶赤黄色ニ染よそ韻屈光性ハ之ヲ認ムルコトナシ
<b>斯絡膜</b>	#	#	#	#	#	#	#	#	#	#	#	+	+	+	+	豚絡膜モ亦灌膜ト同ジク 發生ノ初ハ中胚葉性細胞/箱々集台ノ密ナル程を発けたおり
較 寄				+	+	1	+	ı	ı	1	ı	l	ı	ı	ı	胚葉組織ノ稍々緻密ニ細胞核ノ集合セル程度ニ過デズ
<b>蒸</b> 機能的	#	#	‡	‡	‡_	#	#	+	+	#	#	#	+	+	+	溶膜、箱々其ノ發生ノ乳明明ズルパンの日ノ頃ニシテ夫迄ノ間ハ只中
<b>%態</b> 及體				#	#	#	#	#	#	#	#	≢	#	#	#	
<b>一一</b>				‡	‡	#	‡	#	#	≢	#	≢	‡	#	#	
翼翼		+	+	+	#	+	1	1	+	‡	‡	+	+	+	+	佐物質ノ存在ヲ見ザル時期アリ
角上数		+	+	#	#	+	+	+	+	+	+	#	+	+	+	角膜質質ハ一時重風光
報題				#	#	#	‡	#	#	#	#	#	+	+	+	眼瞼、原基、第7日ニ發生ヲ初ム
市局				#	#	‡	#	#	#	#	#	#	#	#	#	眼瞼・原基(第7日(
明明	第5日	第6日	第7日	第8日	第9日	第10日	第11日	第12日	第13日	第14日	第15日	第16日	第17日	第18日	第19日	

# 第5章 總 括

以上述べ來リシ所ヲ概言スレバ家鷄「エンプリオ」ノ眼球ニ於ケル脂肪及ビ類脂肪ノ發現及ビ其ノ消長ハ大體ニ於テ家鬼胎兒ノ夫レト略ボ軌ヲーニスルモ、各組織個々ノ染色反應並ニ重屈光性所見ニ於テハ全然同一ナリト言フ可ラザルモノアリ、以下其ノ梗慨ヲ述ブルニ當リ努メテ記述ノ簡明ヲ期センガ爲メ、各組織ノ發育ヲ基幹トシ之ニ伴フ脂肪及ビ類脂肪殊ニ「コレステリンエステル」ノ發現狀態ニ就テ述ベントス.

1) 網膜及ビ色素上皮細胞. 孵化第4日ニ於ケル所見トシテ、眼盞ノ內外兩葉ハ其ノ前方ニ於テ旣ニ水晶體板ヨリ獨立セル水晶體囊ヲ抱擁ス、而シテ外葉即チ色素上皮細胞層ハ多クハ1層、時トシテハ2層ノ骰子形乃至短圓柱狀細胞ヨリナリ未ダ色素顆粒ヲ含有スルニ至ラズ、核分裂ハ專ラ內方即チ網膜側ニ偏シテ行ハル、內葉即チ固有網膜層ハ其ノ外層即チ色素上皮側ニ於テ盛ニ核分裂ヲ營ミツツ著シク細胞ノ分化增殖ヲ致ス、而シテ此時期ニ於テ網膜細胞層ハ其ノ硝子體側ノ一部ハ旣ニ僅ニ繊維標造構ヲ呈シ神經繊維層ノ原基ヲ形成ス、色素上皮側ニ於テハ旣述ノ如ク盛ニ核分裂ヲ營ミツツ細胞ハ一般ニ稍々泡狀ヲ呈ス、色素上皮細胞内ニ色素顆粒ヲ見ルハ第5日ニ初マリ、色素ハ主トシテ細胞ノ脉絡膜側ニ存在ス、爾後日ヲ逐フテ其ノ量ヲ増スト共ニ胞體全部ニ亙リ、且初メハ圓形顆粒狀ナリシモノ、漸次短桿狀ヲ呈スルニ至ル、但シ前方即チ毛標部色素上皮細胞ニ於テハ永ク圓形顆粒狀ニヒマルコト他ノ動物ニ於ケルト同ジ、

網膜細胞層ハ第7日=至り早ク既=節細胞層ノ形成ヲ認ム,此際當該細胞核ハ圓形「クロマチンアルム」トナリ胞體亦幾分明朗トナル,斯クテ之等細胞ノ1群ハ漸次母細胞ノ盟ト開離シ,弦=獨立セル1層ヲ形成スルニ至ル,更ニ第8日ノ標本ニ於テハ次位ニ存セシ細胞ノ5,6列ハ再ビ母細胞関ヨリ開離シ,上記ノ變化ヲ呈シツツ節細胞層トノ間ニ著明ニ突起ヲ交錯シテ内網狀層ノ形成ニ干與ス,同樣ノ變化ハ又之ヲ外側細胞ノ間ニ認ムベク,斯クテ外顆粒層及ビ外網狀層ノ形成ニ干與ス,同樣ノ變化ハ又之ヲ外側細胞ノ間ニ認ムベク,斯クテ外顆粒層及ビ外網狀層ノ原基ヲ形成スルニ至ル,斯ノ如ク初メハ只一團ノ細胞群ニ過ギザリシモノ漸次分離シテ層狀ヲ呈シツツ,第13日ニ至レバ末梢ノ一部ヲ除ク外網膜各層ノ形成略ボ完了ス(Falchi ノ設ケル如ク)只前記末梢部ノ一部ニ於テハ分化稍々遅延シ,該部ニ於ケル各層ノ形成ヲ了ルハ第15日ノ頃ナリトス,而シテ視細胞ノ稍々其ノ形ヲ認ムルハ第9日ノ頃ニシテ,第13日ニ至レバ明ニ扁平「コルベン」狀ヲナシテ個々ノ細胞(主トシテ圓錐體)ヲ認識スルヲ得ベシ,油球ノ形成ハ Falchi ニ從ヘバ初メハ無色ニシテ第18日目ニ至リ2,3赤色ニ,第19日ニ至リ他ノモノハ黄色ヲ呈スト云フ・余ノ所見ニヨレバ第17日ニ於テ稍々油球ノ存在ヲ思ハシムルモ染色上確實ニ之ヲ認メ得ルハ第19日ナリトス。

網膜ノ脂肪染色ハ各期ヲ通ジ比較的著明ナラズ,初期ニ在ツテハ内層ノ稍々繊維様ヲ呈セル 部及ビ外層細胞ノ泡狀ヲ呈セル部ニ幾分[ズダン]ノ色ヲ取ルニ止リ,細胞ノ密集セル中央ニ於 テハ殆ド「ズダン」染色ノ顆粒ヲ(細胞ノ内外共ニ)見ルコトナシ,色素上皮細胞亦初期ニ於テハ脂肪顆粒ヲ見ズ.網膜各層ノ發育分化ニ件ヒ繊維様層即チ神經繊維層及ビ内外網狀層等ハ多少「ズダン」ノ色ヲ取リテ成長動物ノ網膜ト稍々相似タル染色反應ヲ呈スルニ至ル. 此種染色反應ノ外,第8日ノ頃ヨリ獨リ網膜ノミナラズ自餘ノ各組織ニ於テモ家鬼胎兒ニ見シト同樣,「ズダン」ニ帶赤褐色,「ニルブラウ」ニ濃青色ニ染メル不整顆粒狀乃至空胞狀物質ノ夥シク發現スルヲ見ル,此物質ハ殊ニ網膜ニ多ク且他ニ比シ比較的永ク發現スルヲ見ル.

重屈光性物質ハ既ニ第5日ノ標本ニ於テ著明ニ網膜ニ發現シ(內外層共ニ),溫メザル標本ニ於テハ專ラ小針狀ヲ呈ス,孵化ノ央ニ至レバ之等針狀結晶ハ屢々相融合シテ大ナル結晶塊ヲ析出スルコト家東胎兒ノ場合ト相同ジ,網膜各層ノ形成サルルト共ニ重屈光性物質モ亦屢々層狀ヲナシテ發現スルヲ見ル,此等物質ハ多クノ場合細胞間ニ存在スルモノノ如ク,只極メテ小ナル結晶ノミハ細胞内ニ存スルヲ見ル,溫ニョリテ消失シ冷却ニ從と再現シ,且液體結晶ヲ呈スルコトハ他部ニ發現スル者ト共ニ極メテ明瞭ニ之ヲ看取スルコトヲ得,以上ノ重屈光性所見ハ孵化ノ終期ニ至ル迄日ニョリ多少ノ消失ヲ見ルモ,大體ニ於テ極メテ著明ニ發現シツツ終ニ破殼期ニ至ル.

2) 視神經纖維及ビ「ベクテン」. 視神經原基ハ第4日ノ標本ニ於テ見ル如ク,第1眼胞ノ前腦側方ニ突起狀ニ進出スルト共ニ眼莖トシテ發育セル狀況ヲ認ムルヲ得ルガ,此際眼莖ハ固ヨリ中空ニシテ其ノ側壁ノ細胞ハ勿論第2眼胞外葉ト相連續ス,而シテ第5日ニ至レバ第2眼胞ノ內葉即チ固有網膜ノ細胞層が增殖シテ眼莖内ニ進入スルヲ見ルベシ,斯クテ視神經原基ハ初期ニ於テハ専ラ細胞性成分ヨリナルモ,間モナク細胞ノ纖維化ニヨリ固有ノ纖維性造構ヲ呈スルニ至ル.

脂肪染色反應ハ第7日以前ニ於テハ乳頭部及ビ神經繊維間ニ毫モ脂肪染色ヲ認メズ,第8日 以降ニ至レバ旣述ノ如クー般ニ顆粒狀乃至空胞樣脂肪物質ノ發現ヲ見ルト共ニ視神經繊維內ニ 於テモ亦此種物質ノ出現ヲ見ル,時期稍々進メバ視神經繊維ハ節狀板後部ニ於テ「ズダン」染色 ニヨリ有髓神經繊維固有ノ色調ヲ帶フルヤ言ヲ俟タズ。

重屈光性物質ハ 8,9 日ノ頃ニ至レバ多數ノ小針狀又ハ集合性結晶塊ヲ見,終期ニ至ル迄殆ド減少ヲ見ルコトナクシテ破殼期ニ至ル,但シ破殼直前ニ於テハ稍々減少セリ.

「ペクテン」! 初メテ其! 形態ヲ現スハ第7日ニシテ先ヅ視神經進入部ニ於テ眼胞! 内外兩葉 即チ固有網膜細胞並ニ色素上皮細胞ガ互ニ増殖鬱生スルニョリ少シク硝子體腔ニ凸隆ヲ來シ其ノ中心部ニ更ニ眼後方! 中胚葉性組織ガ血管ヲ伴ヒツツ進入増殖シ, 茲ニ「ピラミツド」形! 隆起ヲ形成ス, 而シテ此隆起部ョリ更ニ一條! 線狀突起ヲ出シ硝子體腔内ニ挺進ス, 此者日ヲ逐フテ漸次發育シ, 初メハ單一! 直線狀ヲ呈セシモ! 或ハ蛇行狀トナリ, 或ハ蜿蜒囘轉シ且其! 末端ニ Hütchen ヲ戴ク, 「ペクテン」ハ其! 發育! 初期ニ在テハ幼弱ナル細胞 (外胚葉及ビ中胚葉性) ト 関形照色! 小色素顆粒! 少數ヲ含メル外, 稍々多數! 赤血球ヲ有ス, 而シテ其! 娟

狀部ニハ常ニ比較的大ナル血管腔ヲ見ル、發育進ムト共ニ甚多數ノ小血管ヲ發生シ組織ハ殆ド血管腔ノ集合ヨリナレルガ如キ觀アリ、同時ニ色素顆粒モ漸次増加シ、常ニ末端部ニ濃厚ニシテ且主トシテ組織ノ外表ニ位ス、脂肪染色ハ血管内容以外ニ於テハ何レノ時期ニ在テモ殆ド之ヲ見ザルモ、重屈光性物質ハ第8日ノ標本ニ於テ初メテ點々其ノ存在ヲ認メ、以後日ヲ逐フテ漸次増加スルモ他ノ部ノモノト同ジク破殻前ニ至レバ著シク減少ス、而シテ結晶ハ温メザル標本ニ在リテハ常ニ小針狀又ハ顆粒狀ヲ呈ス.

3) 水晶體. 孵化第4日水晶體囊ハ既ニ水晶體板ヨリ絞斷サレ,獨立セル組織トシテ其ノ存在ヲ認メラル. 而シテ其ノ中心ニハ尚ホ可ナリ大ナル腔ヲ存シ中ニ2,3ノ細胞性成分ヲ含メリ,水晶體囊後面ノ細胞ハ此期ニ於テ既ニ著シク其ノ高徑ヲ増シ將ニ繊維化セントスル狀況ニ在リ,第5日ニ至レバ此等ノ細胞ハ全部繊維化シテ全然腔内ヲ充タスニ至ル,爾後日ヲ經ルト共ニ赤道部ニ於ケル上皮細胞ハ盛ニ新繊維ヲ形成シツツ漸次水晶體ノ形ヲ大ニス,但シ既ニ述ベタル如ク鳥類家鷄「エンブリオ」ノ眼球ニ於テハ哺乳動物胎兒ノ如ク所謂水晶體血管網ヲ形成スルコトナク且水晶體ハ眼球ノ大サニ比シ可ナリ小ナルヲ特異トス.

脂肪染色ハ他ノ組織ニ於ケルガ如ク第8日ニ發現スル顆粒狀若クハ空胞樣脂肪物質ノ外特ニ 認ムベキ染色ヲ見ズ、只上皮細胞及ビ赤道部ニ於ケル Ringwulst ノ「ニルブラウ」ニョリ稍々 濃青色ニ染ムヲ異トスベキカ、(但シ空胞ハ比較的永ク出現ス)要スルニ水晶體ノ脂肪染色ハ之 ヲ家鬼胎仔ニ比シ甚份弱ナル狀態ニ在リ、而シテ重屈光性物質ノ發現亦彼ニ比シ常ニ少ク、初 期ョリ中期ニ亙リ上皮下殊ニ赤道部皮質ニ於テ小針狀若クハ線狀(繊維間隙ニ現ルル)ノ重屈 光性物質稍々著明ニ發現スル外、中心部ニ於テ稀ニ點狀又ハ小針狀ノ結晶ヲ見ルノミ、後期ニ 於テハ其ノ出現比較的少ク皮質又ハ中心部ニ孤在性ノ小ナル重屈光性物質ヲ見ルニ過ギズ.

4) 硝子體. 第4日ノ標本ニテハ硝子體腔ハ僅ニ眼蓋ト水晶體囊トノ中間ニ存スル狭隘ナル間隙ニ過ギズシテ,其ノ内容ハ少量ノ中胚葉組織ノ存在ヲ見ルノミ,第5日ニ至リ其ノ間隙稍々擴大スルト共ニ繊維標組織成分ノ發育ヲ見ル,第6日乃至第7日ニ至リ眼球原基ノ俄ニ其ノ大サヲ増スト共ニ,硝子體腔亦著シク廣濶トナリ,中ニ存スル繊維標組織ハ其ノ網眼内ニ夥シキ小圓形ノ核様小體ヲ包含ス,此小體ハ「ヘマトキシリン、エオジン」染色標本ニテハ著明ニ染色(「ヘマトキシリン」ノ色ヲ取ル)スルモ脂肪染色標本ニテハ全ク之ヲ認ムルヲ得ズ,此小體ハ第5日ニ於テ既ニ幾分發現シ第6—7日ニ於テ最著明ニシテ第8日ニ至レバ稍々其ノ數ヲ減シ,第9日ノ標本ニ於テハ殆ド之ヲ見ザルニ至ル(此小體ノ本態ニ就テハ別ニ研究スルノ要アリ).

硝子體腔ハ「ズダン」III ニョリ帶赤黄色ニ染ム、(多クノ場合眼球原基ハ「ゲラチン」包埋標本ニテハ著シク收縮壓平サルル為メ硝子體腔ハ網膜原基ノ重疊セル間ノ狭キ空隙ニ過ギズ、此場合其ノ空隙ガ如上ノ染色ヲ呈スルモノニシテ壓平セザル標本ニテハ硝子體腔ハ殆ド染色セザルヲ常トス)而モ之ヲ家兎胎仔ノ硝子體染色ニ比スレバ遙ニ淡黄色ニシテ且赤ミニ乏シ、既述

ノ如ク家兎胎仔ニテハ殊ニ胎生第20日前後ニ於テ極メテ美麗ニ朱赤色ヲ呈スルモ家鷄「エンブリオ」ニ在リテハ僅ニ帶赤黄色ヲ呈スルノミ,但シ家鷄「エンブリオ」ニテモ孵化第13,4日以後ニ至レバ「ニルブラウ」染色ニヨリ淡紫色ヲ帶ブルハ家兎脂仔ト異ル所ナシ.重屈光性物質ハ何レノ時期ニ於テモ硝子體内ニ發現スルコトナシ.

5) 葡萄膜系統. 虹彩ノ角膜原基ョリ分離シ短キ突起トシテ獨立組織ヲ形成スルハ第7日ニシテ,第8日ニ至レバ虹彩裏面ノ皺襞及ビ毛膜突起ノ原基ヲ發生ス,同時ニ瞳孔領ニ於テ瞳孔膜原基ト見做スベキ繊維素性膜樣組織ヲ生ジ水晶體前面ヲ被フ,虹彩及ビ毛膜體基質ニ色素顆粒ノ發生スルハ第10日ニシテ同時ニ虹彩後面ノ圓柱上皮細胞内ニモ 亦色素顆粒ヲ認ムルニ至ル.

虹彩及ビ毛機體/脂肪染色ニ就テハ第8日ノ標本ニ於テ初メテ虹彩筋原基ト認ムベキ脂肪染色ヲ見、第11日ノ頃ニ至リ著明ニ「ズグン」赤染/顆粒ヲ認ム、第12日ノ標本ニ於テハ毛機體基質内ニ亦類脂肪顆粒ノ存在ヲ見ル.

「ズダン」及ビ「ニルブラウ」ニョリ赤褐色若クハ濃青ニ染ム顆粒状乃至空胞樣脂肪物質ノ發現ハ他ノ組織ト同ジク第8日ノ頃ョリ著明ニ之ヲ認ムルモ、2,3日ノ後早ク既ニ減少ニ傾ク、重屈光性物質ハ初期ニ於テ未ダ虹彩毛樣體ノ分化未了ノ時期ニ在リテモ略ボ其ノ部ト認ムベキ部分ニ於テ多數ニ發現シ、第9日ノ頃ョリ彌々其ノ量ヲ増スモ終期ニ至レバ他ノ部ノ類脂肪ト共ニ少シク其ノ發現ヲ稀疎ニス、而シテ此部ニ發現スル結晶ハ多クハ小針狀ヲ呈ス.

脉絡膜ハ第6日ノ標本ニテ既ニ細胞ノ配列ニョリ鞏膜ト共ニ其ノ原基トシテ認メ得ベシ、第8日ニ至レバ脉絡膜ハ色素上皮層及ビ鞏膜軟骨部(軟骨操構造ヲ呈スルハ第8日ニ初ル)ノ間ニ挟マリ、僅ニ赤血球ニ富メル菲薄ナル組織トシテ認メラルルニ過ギズ、此時期ニ於ケル脉絡膜ノ「ズダン」染色ハ専ラ血管内容ノ類脂肪ニョリ、間質内ニハ認ムベキ脂肪顆粒ノ存在ヲ見ズ、第15,6日ニ至リ間質組織ノ稍々發育スルト共ニ脂肪染色ハ管ニ血管内容ノミナラズ 間質内ニモ亦多數ノ脂肪顆粒ノ發現ヲ見ル、而シテ之等脂肪顆粒ハ多クハ組織球機細胞、時トシテハ又結締織細胞内ニ存在シ、又往々遊離シテ存在ス、重屈光性物質ハ各時期ヲ通ジ甚著明ニ發現シ常ニ小針狀ヲ呈ス、稍々發育セル時期ニ於テハ血管内容亦著明ニ重屈光性ヲ呈ス、

6) 鞏膜. 軟骨機構造ヲ呈スルハ第8日ニシテ其ノ以前ニ於ケル鞏膜原基ハ脉絡膜ト共ニ 具細胞ノ配列ニヨリ僅ニ周圍ノ中胚葉性組織ト區別シ得ル程度ニ止ル. 此時期ニ於ケル鞏膜ノ 脂肪染色ハ甚幽微ニシテ特ニ認ムベキモノナシ,第10日ノ頃ヨリ軟骨部ハ「ニルブラウ」ニョ リ其ノ基質著シク帶青紫色ニ染ミ軟骨細胞ハ青色顆粒狀ニ染色ス,「ズダン」ニョリテハ細胞ノ 1,2極メテ幽微ニ染色セルヲ見ル外多ク染色ヲ見ズ. 重屈光性物質ハ未ダ軟骨機構造ヲ呈セザ ル初期ニ於テハ脉絡膜ト同ジク著明ニ愛現ス,軟骨燥部ハ「ニルブラウ」ニ著明ニ染色スルニ拘 ラズ重屈光性物質ハ窓ニ之ヲ認ムルコトナシ,之ニ反シ繊維機部殊ニ角膜ニ近ク存スル該部ニ 於テハ第8日ノ頃ヨリ著明ニ重屈光性ヲ認メ,第11日ノ頃ニ至レバ著シク瀰漫性ニ「ズダン」 二染 · 且顆粒狀類脂肪 > 含有ス. 重屈光性物質亦此時期ョリ著明ニ發現ス,此部ニ脂肪顆粒ノ發現ト同時ニ結膜下組織ニ於テモ亦著明ニ類脂肪反應 > 呈スル > 見ル. 骨樣 登膜部 ハ第 17 日ノ標本ニ於テ石灰化 > 認 メ、此部ハ脂肪染色並ニ重屈光性共ニ陰性ナリ

7) 角膜. 第4日及ビ第5日ノ頃ニ於ケル角膜原基ハ只1層若クハ2層ノ低キ骰子形細胞 ノミョリナリ未ダ寶質組織ヲ形成スベキ中胚葉組織ノ存在ヲ見ズ,之ヲ見ルハ第6日ニ初マル・ 第7日ニ至レバ旣ニ一部內皮細胞ノ形成ヲ見ルモD氏膜ハ未ダ之ヲ見ズ.

脂肪染色反應ハ初期ニ於テ角膜原基ノ單ナル上皮細胞層ニ過ギザル時期並ニ中胚葉性組織ノ漸ク實質ヲ形成スル時期ニ於テハ著明ナラズ只第7日ノ標本ニ於テ上皮細胞層表層ニ著明ニ脂肪顆粒ノ存在ヲ見タリ、第8日頃ニ至リー般組織ニ不正形顆粒狀若クハ空胞操脂肪物質ノ發現スルト共ニ角膜上皮及ビ質質組織内ニモ亦多數ノ上記物質ノ發現ヲ見ルモ其ノ發現ハ3,4日間ニ過ギズシテ再ビ全然之ヲ見ザルニ至ル、夫レ以降ニ於テハ上皮細胞層ノ常ニ多少「ズダン」ノ色ヲ取レルノ外特ニ脂肪染色ヲ見ズ.

重屈光性物質ハ角膜ノ只單一ノ上皮細胞ニ過ギザル時期ニ於テ既ニ明ニ之ヲ認メ得ベシ,第7日乃至8日以降ニ於テハ上皮細胞層位ニ質質内共ニ著シク多數ノ小針狀結晶ノ發現アリ,而シテ之等結晶ハ他ノ組織ニ關係ナク,第10日頃ヨリ俄ニ其ノ出現ヲ減ジ一時ハ殆ド其ノ發現ヲ認メザルガ如キ狀態ニアリシガ,12,3日ヨリ再増加ノ傾向トナリ14日頃ニ於テ最高潮ニ達ス,爾後更ニ漸減シテ終期ニ至ル.

8) 眼瞼. 初メテ眼瞼/突起狀ヲナシテ發生スルハ第8日ナリトス.此時期ニ於テ旣ニ「ズダン」ニョリ皮下組織ハ黄赤色ニ染メリ,爾後日ヲ重ヌルニ從ヒ脂肪沈着ハ漸次増加シ組織ハー般ニ瀰蔓性ニ黄赤色ヲ呈スル外,多數ノ脂脂肪顆粒含有ノ組織球細胞並ニ結締織細胞ノ出現ヲ見ル,此狀況ハ眼瞼以外ノ頭部皮下組織ニー層著明ニシテ眼瞼皮膚ハ寧ロ其ノ脂肪化微弱ナルニ似タリ,而モ眼瞼皮膚ニ於テモ終期ニ近ゾクニ從ヒ漸ク一部ノ脂肪化著シク,上皮細胞層殊ニ瞼縁ニ近キ上皮細胞ハ獨リ表層角化セル部ノミナラズ基底細胞ニ於テモ著シク脂肪顆粒ヲ以テ浸潤シ,眼瞼遊離端,緣間部及ビ結膜面ノ瞼縁ニ近キ部等ニ於ケル上皮細胞層ハ一面ニ脂肪顆粒ノ沈着ニョリ全然赤色ヲ呈スルニ至ル.

眼瞼=於ケル重屈光性物質ハ其ノ發生ノ初メョリ著明=發現シ角膜等=於ケルト同ジク多ク小針狀ヲナシテ現レ,加溫ニョリテ消失シ,再現セルモノハ多ク定型的交叉像ヲ呈ス,而シテ最著明ニ重屈光性ヲ呈スルハ他ノ部ト同ジク第14,5日ノ頃ニシテ,第16,7日ヨリ漸次減少シ終期ニ至レバ僅ニ角化セル表層上皮細胞ガ波狀ヲ畵キ著明ニ光レルヲ見ルノ外間質組織内ニハ少量孤在性ノ顆粒ヲ認ムルノミナリ。

# 第6章 要 結

1) 家鷄「エンブリオ」ノ各發育時期ニ於テ眼球ニ發現スル脂肪及ビ類脂肪殊ニ「コレステリ

ンエステル」ハ家鬼胎仔ニ見ルト同ジク極メテ顯著ナルモノアリ、而シテ家鬼胎仔ニ比スレバ 初メョリ其ノ發現著明ニシテ全經過中サシタル消長ヲ見ルコトナク、破殻前 2,3 日ニ至リ漸ク減少ノ傾向ヲ呈ス・

- 2) 脂肪染色反應ハ家鷄眼球組織ニ在テハ比較的微弱ニシテ家兎胎仔ニ於テ最著明ニ染色反應ヲ呈セシ硝子體ノ如キモ家鷄ニ在リテハ彼ノ如ク鮮魔ナラズ,只微ニ帶赤黄色ニ染ムノミ,自餘ノ各組織モ亦染色微弱ニシテ只僅ニ部分的ニ「ズダン」又ハ「ニルブラウ」ニ染色スルヲ見ルニ過ギズ,之ニ反シテ頭部皮膚並ニ眼球外圍ノ結締組織中ニハ極メテ著明ニ「ズダン」染色ノ脂肪 機物質ノ存在ヲ見ル.
- 3) 脂肪沈着ノー種トシテ家鬼胎仔=見シ帶赤褐色顆粒狀乃至空胞機物質ハ及之ヲ家鷄「エンブリオ」ニモ見ルベク,孵化第8日ノ頃ヨリ總テノ組織ニ發現ス,但シ其ノ存在ハ比較的短期ニシテ角膜及ビ虹彩ノ如キハ2,3日ニシテ既ニ著シク消退ス、網膜及ビ脉絡膜ニテハ其ノ存在的々長期ニ瓦ル。
  - 4) 水晶體ニ於ケル脂肪染色ハ甚微弱ニシテ上記脂肪機物質ノ發現モ亦少シ.
- 5) 重屈光性物質ハ眼球各組織ニ於テ著シク發現スルモ最著明ナルハ家鬼胎仔ニ同ジク網膜ナリトス, 之ニ次グハ葡萄膜系統ニシテ, 角膜及ビ鞏膜繊維儀部ハ稍々之ニ劣リ, 鞏膜軟骨部ハ「ニルフラウ」ニ著明ニ「ヴヰオレツト」ニ染色スルニ拘ラズ殆ド重屈光性ヲ呈セズ.
- 6) 水晶體ノ重屈光性ハ何レノ時期ニ於テモ家鬼胎仔ニ比スレバ稍々少ク,發現部位ハ皮質 殊ニ赤道部皮質ヲ主トス,此部ニ於テハ結晶ハ小針狀又ハ線狀ヲナシ多ク繊維ノ走行ニ一致シ テ現ル,中心部ニ於テハ顆粒狀重屈光性物質僅ニ孤在性ニ發現スルノミ.
- 7) 家鷄虹彩筋ハ成熟動物ニ在リテハ極メテ著明ニ脂肪化ヲ認ム,「エンブリオ」ニ於テモ既ニ筋繊維發生ノ初期ヨリ脂肪化ヲ認メ, 發育ノ進ムニ從ヒ益々顯著トナル.
- 8) 鳥類特有ノ器官トシテ「ペクテン」ノ發育ハ余ノ檢索ニョレバ第7日ニ至リテ初メテ之ヲ認ムベク,爾後漸次發育シテ孵化第17,8日ニ至レバ囘轉實ニ15,6ニ及ブ,而シテ此組織ニ於ケル脂肪染色ハ他ノ組織ト同ジク甚幽微ニシテ血管腔以外ハ殆ド脂肪染色ヲ見ズ,重屈光性物質ハ第8日ノモノニ於テ初メテ小點狀ヲナシテ現レ,日ヲ經ルニ從ヒ漸次其ノ量ヲ増スモ網膜ニ比スレバ其ノ發現遙ニ少シ
- 9) 角膜ノ重屈光性物質ハ初期ニ於テ未ダ單ナル上皮層ノミノ頃ニ於テ既ニ之ヲ認メ。中胚葉性組織ノ實質ヲ構成スルニ至リ著シク著明トナル、第10日ノ頃ニ至リ之等重屈光性物質一時其ノ發現ヲ示サザルニ至ルモ、2,3日ニシテ再現スルヲ見ル、此一時的重屈光性物質ノ消退ハ恐ラク何等ノ意味アルモノニアラザルベク、單ニ個體的關係ニ過ギザルベキカ、
- 10) 眼瞼ノ脂肪浸潤ハ發育ノ初期ニ於テ既ニ著明ニシテ,日ヲ經ルニ從ヒ漸次其ノ度ヲ加へ, 皮下組織內ニ多數ノ脂肪顆粒攝取ノ遊走細胞及ハ組織球細胞ノ存在ヲ見ル,但シ之ヲ他ノ部ノ 皮膚ニ比スレバ浸潤稍々輕度ナリ、上皮細胞層モ亦後期ニ至レバ著明ニ脂肪浸潤ヲ呈シ獨リ表

水晶體ニ於ケル重屈光性物質ノ發現比較的著明ナリ 上 第15 日所見(70倍擴大)

網膜水晶體及ビ中胚葉組織ニ於ケル重屈光性物質所見

家鷄「エリブリオ」第6 日(140倍)

第2圖

同上 第10 日所見

(140倍)

第3

同上

**鞏膜軟骨部** 

層角化層ノミニ止マラズ基底細胞及ビ中間細胞亦夥シク脂肪顆粒ヲ沈着スルニ至ル.

重屈光性物質ノ發現亦初期ヨリ著明ニシテ 14,5日ニ至ル迄漸次增量ス, 之ヨリ以後ハ稍々其ノ發現ヲ減弱ス.

稿ヲ終ルニ臨ミ中院博士ノ懇篤ナル指導ト畑教授ノ周到ナル校陽ニ對シ謹デ満腔ノ感謝ヲ捧グ

# 文 獻

1) T. Uchiyama, Beiträge zur Morphologie des Lipoidstoffwechsels. 1, 2, 3, 4. Mitteilung. Virchow's Archiv 1930.

2) Little, The development of the chicks.

3) Bernd, H., Die Entwicklung des Pektens im Auge des Hühnchens aus dem Blättern der Augenblase. Inaug.-Diss. med. Bonn 1905.

4) Philip von Franz, Schorgan, Lehrbuch der vergleichenden mikroskopische Anatomie der Wirbeltiere. 1913.

5) Nussbaum, Entwicklungsgeschichte d. menschlichen Auges. Gräfe-Sämisch, Handbuch der gesam. Augenheilkunde. 3. Aufl.

6) Pütter, A., Organologie des Auges. Gräfe-Sämisch, Handbuch der gesam. Augenheilkunde. 3. Aufl.

#### 正 誤

本誌第45年第8號論文文獻中下記番號ノ=ヲ附シアル箇所脫落ニ付増補ス.

- 2) Greeff, R., Gräfe-Sämisch, Handbuch der gesammt. Augenheilk. 2. Aufl. V. K.
- 5) Nussbaum, Gräfe-Sämisch, Handbuch der gesammt. Augenheilk. 3. Aufl. I. T. VIII. K.
- 6) Pütts, A., Gräfe Simisch, Handbuch der gesammt. Augenheilk. 3. Aufl. I. T. X. K.